私は何のために生きているのか

―礼拝メッセージとディスカション―

中　尾　邦　三

目　　次

1．摂理の神　1

2．人生の導き　7

3．神との友情　13

4．人生と永遠　19

5．生きた供え物　25

6．信じること、属すること　31

7．神の子の栄光　37

8．信仰と奉仕　43

9．救われるには　49

10．遣わされなければ　55

11．いちばん大切なこと　61

12．それゆえ、あなたがたは　67

聖句は、新改訳聖書第二版（©日本聖書刊行会）より引用しました。

摂理の神

創世記 45:1-8

45:1 ヨセフは、そばに立っているすべての人の前で、自分を制することができなくなって、「みなを、私のところから出しなさい。」と叫んだ。ヨセフが兄弟たちに自分のことを明かしたとき、彼のそばに立っている者はだれもいなかった。
45:2 しかし、ヨセフが声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、パロの家の者もそれを聞いた。
45:3 ヨセフは兄弟たちに言った。「私はヨセフです。父上はお元気ですか。」兄弟たちはヨセフを前にして驚きのあまり、答えることができなかった。
45:4 ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか私に近寄ってください。」彼らが近寄ると、ヨセフは言った。「私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。
45:5 今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。
45:6 この二年の間、国中にききんがあったが、まだあと五年は耕すことも刈り入れることもないでしょう。
45:7 それで神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。
45:8 だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。神は私をパロには父とし、その全家の主とし、またエジプト全土の統治者とされたのです。

今年、私たちは、全教会で「目的の四十日」というプログラムを実施します。主イエス・キリストのご受難を覚える四十日の「レント」（受難節）が 2 月 9 日の灰の水曜日から始まり、3 月 26 日のイースター前夜まで続きます。レントは、日曜日を除いて 40 日ありますので、その 40 日の間、リック・ウォレンの『人生を導く５つの目的』を毎日一章づつ読み、そこにある聖書のことばに導かれて人生の目的を探求していくというのが、「目的の四十日」というプログラムです。この書物は、内容が豊富で、40 日でこれをマスターするのは、難しいかもしませんので、日本語礼拝では、この一月から、前もって「目的の四十日」プログラムの助けになるメッセージをすることにしています。日曜日と水曜日の聖書のクラス、水曜日の祈り会でも、この三ヶ月は、すべて「目的の四十日」に集中しますので、教会中、どこを見ても、「目的の四十日」という言葉を目にし、耳にすることになるかと思います。これは、私たちの信仰にとって、また、教会の今後にとって、とても大切なことですので、他のプログラムをストップして、このことに集中するだけの価値はあると思います。教会に集っておられる方々が、ひとり残らず、四十日の、目的探求の旅に参加していただきたいと願っています。

一、人生の目的と創造の神

しかし、「人生の目的」はどうやって見つけることができるのでしょうか。それは、何年もの思索の果てに、やっと悟りを開いて得られるものなのでしょうか。それとも、試行錯誤しながら、自分で作り出すものなのでしょうか。聖書は、そのどちらでもないと言っています。人生の目的は、私たちを創造し、私たちの人生を導いておられる神によって知らせていただくも

のなのです。私たちは偶然にここに生まれたのではありません。神によって造られました。神は、私たちを無意味に造られたのでなく、目的をもってお造りになりました。人生の目的は、創造の神、造り主である神を知ることによって得られるのです。

私は、天文学者や宇宙物理学者の話を聞くのが好きですが、そういう話を聞けば聞くほど、なんと宇宙は広大なのだろうと思います。地球は太陽系の惑星のひとつに過ぎず、太陽系は銀河系のほんの一部分にすぎません。銀河系には、太陽系のようなものが数限りなくあり、大宇宙には、銀河系のような小宇宙が、数え切れないほどあるというのです。人間は、やっと月に到着し、火星や土星を無人の探索衛星で調べ始めたに過ぎず、大宇宙のことを、ほとんど何も知らないと言ってよいかもしれません。しかし、神は、この大宇宙を造り、そのすべてを知っておられるお方です。詩篇 19:1 に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」とあるように、この広大な宇宙は、限りない知恵や力、栄光を現わしているのです。

創世記第一章には、神が私たちの住む世界を造られたことが書かれていますが、そこには、神がこの世界のすべてのものを目的をもって造られたとあります。たとえば、太陽、月、星について、神は「光る物は天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のために役立て。天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」（創世記 1:14-15）とありますが、神は、太陽、月、星が、それによって、「季節」と「日」と「年」がわかるために、また、地上を照らすために造られたと言うのです。神は、宇宙を、太陽系を、地球を、そこに住む人間のために造られました。こういう聖書の箇所を読んで、「これはまるで天動説のようで、時代遅れの考え方だ。」と感じる方もあるかもしれませんが、それは、見当違いです。これは、神の、私たち人間に対する愛を語っているのです。この宇宙にどんな物体があり、生命体があろうとも、神の愛を受け止め、それに応答できるのは人間以外にありません。神は、広大な宇宙を創造されました。しかし、神は、この広大な宇宙の他の何者にもまさるものとして人間を造ってくださったのです。聖書は、他の生物は「種類にしたがって」造られたにすぎませんが（創世記 1:11-12, 21, 24-25）、人間だけが「神のかたち」に造られたと言っています（創世記 1:26-27）。今朝の詩篇の中にも「あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。」（詩篇 8:5）とありました。古代の聖書学者たちは、「人間は神の創造の冠である。」と言いましたが、まさにその通りです。神が、その人間を意味なく、目的なく、造られるはずがありません。他の被造物でさえ、目的をもって造られたのなら、人間は、なおのこと、目的をもって造られているのです。

二、人生の目的と啓示の神

この世界も、私たちひとりびとりも、神によって、目的をもって造られました。私たちは決して偶然の産物ではありません。そして、神は、人間に、その目的を知ることができるようにしてくださいました。太陽も、月も、星も、そして、地上のさまざまな生き物も、目的をもって造られました。しかし、太陽や月、星は、神の目的を知りません。他の動物にどれほど造り主である神を感じる力があるのか、私にはわかりませんが、どんな動物、生物があったとしても、人間以上に、神を理解できるものはないと思います。だから、神は神は常に、他の何者でもなく人間に、人間のことばでご自分を告げ知らせておられるのです。神は、人間にご自身を示すため、イエス・キリストにおいて、人間となって、この世に来てくださり、私たちと同じ

姿、かたちになってくださいました。神は、預言者たちを通し、イエス・キリストを通し、使徒たちを通して私たちに語りかけ、ご自身の目的、ご計画、そして、お心を私たちにあますところなく示してくださいました。神は、ご自分を隠しておられる神ではなく、ご自分を示し続けておられる神です。神がご自分を示してくださることを「啓示」と言いますが、神は、まさに啓示の神です。私たちは、神の啓示によって、人生の目的を知るのです。

神は、聖書を、神の啓示の書物として、私たちにお与えになりました。聖書は、神の思いのすべてを語り伝えるものであり、聖書は「神のことば」です。聖書が「神のことば」であるので、「聖書に書いてある」ということと、「神が言われる」ということが全く同じこととして扱われているのです。たとえば、イエスは、四十日、荒野で過ごされた後、誘惑に遇われましたが、その時、「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」(4 節)「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」（7 節）「『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」（10 節）と言ってサタンを斥けました。イエスは、「…と書いてある。」と言われましたが、それは、「神は…と言われる。」というのと全く同じ意味でした。もし、聖書が神のことばでなかったら、サタンは「聖書は、古代の宗教書にすぎないのだ。そんなものに何の権威があるのか。」と言って、さらにイエスを攻撃したことでしょう。聖書が神のことばであることは、サタンすらも認めている事実なのです。

もうひとつ例をあげましょう。マタイ 19:3 に「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」というパリサイ人のことばがあります。パリサイ人は、イエスから答えを欲しいと思って、こう言ったのではなく、イエスのことばのあげあしを取り、罠に陥れるためでした。パリサイ人は、「男の勝手で妻を離別させることができる。」と考えていたようですが、イエスの答えは、「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。」（マタイ 19:5）というものでした。そしてイエスは、「それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」（19:6）と言われました。今朝は「離婚」という主題をお話しする時ではありませんので、これ以上はくわしく触れませんが、私が、この箇所を引用したのは、5 節の「創造者は、…と言われたのです。」という部分に注目していただきたいためです。創造者である神が語られたということば、「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」というのは、創世記 2:24 のことばです。創世記 2:24 は、直接、神がこう言われたということばではなく、いわば、説明文、ナレーションの部分です。創世記を書いたモーセのことばであると言うこともできます。しかし、イエスは、「創造者が言われた。」と明言しておられます。聖書に書かれていることは、神が言われたこと、「聖書にこう書いてある。」というのと、「神はこう言われる。」というのは全く同じことなのです。

私たちは聖書を読む時、聖書を、まるで小説を読むように、単に読書の対象にする、百科事典を読むように、単に知識の源泉にする、専門書を読むように、単に研究の対象にするというようなことがないようにしたいものです。信仰を持たない人、あるいは神を求めない人は、聖書に対してそのような態度を取るかもしれませんが、そんなふうに聖書を読んでも、神の人間

に対する語りかけを聞くことはできませんし、そのことによって神を知ることも、救いを得ることもできないのです。聖書を読む時には、そこに神の語りかけを聞く、神のお心を知って、それに従っていく、そのような態度で、神のことばに向かいたいものです。

神が、聖書によって、ご自身を現わし、私たちに人生の目的を表わしておられるなら、私たちは、人生の目的を、神と神のことばに求めなければなりません。神の創造された世界では太陽も月も星も、神の目的どおりに存在し、その役割りを果しています。植物も、動物も、神が創造された物はすべて、神の目的が何であるかを知らなくても、神の目的どおりに生き、動き、存在しています。ところが、神の目的を知ることのできる人間が、神の目的から離れた存在となり、神の目的に従って生きていないのです。人間だけが神の目的を知ることができるのに、人間がいちばん、神の目的をないがしろにしています。人間は、神の目的を知ることができるという点では、素晴らしいものですが、神の目的に従わないという点では、それを知ることができる能力を与えられているだけに、まことに、罪深いものです。私たちは、この罪を悔い改め、謙虚に、神のことばに聴き従い、私たちに与えられた人生の目的を求め続けたく思います。

三、人生の目的と摂理の神

今朝の第一のポイントは、神は私たちを目的をもって造られたお方であること、第二のポイントは、神はその目的を聖書によって教えておられるということでした。今朝の第三のポイントは、神がその目的を成し遂げるお方であるということです。神は、この世界を目的をもってお造りになりましたが、創造されたあと、この世界に無関心で、それをほうっておられるというのではありません。神は、ご自分の造られた世界を愛し、いつくしみ、ひきつづき、関わりをもっておられます。この世界に目的を与えただけでなく、神は、この世界を、ご自分の目的に向かって導いておられるのです。この神の導きを「摂理」と呼びます。日本語で「摂理」というと難しく聞こえますが、英語では "providence" と言います。"provide" という動詞からできた名詞ですが、"provide" という英語も、もとはラテン語から来ています。"pro" は「前もって」という意味で、"vide" は "video" という言葉があるように「見る」という意味です。「前もって見る。」それが「摂理」という言葉の意味です。神が、この世界の目的を前もって見ておられ、この世界をそこに導いておあられる、それが「摂理」です。

神の摂理は、聖書のいたるところに示されていますが、中でも最も感動的なものは、今朝、その一部分を読みました、ヨセフの物語でしょう。ヨセフは、兄弟にねたまれ、エジプトに奴隷として売られるのですが、奴隷の身分から、また囚人の立場から、エジプトの宰相にまで登りつめます。それは、ヨセフによって、ヤコブの一族、イスラエルが救われるためでした。神は、神の民、イスラエルを目的をもって選び、イスラエルにその目的を達成させるために、ヨセフを用いたのです。ふつうなら、権力を手に入れたヨセフが、自分を亡き者にしようとした兄たちにしかえしをするところですが、ヨセフは神の摂理を知っていましたから、兄たちに、「私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。」（創世記 45:4-5）と言って兄たちを赦しています。ヨセフは続いて、こう言いました。「この二年の間、国中にききんがあったが、まだあと五年は耕すことも刈り

入れることもないでしょう。それで神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。神は私をパロには父とし、その全家の主とし、またエジプト全土の統治者とされたのです。」（創世記 45:6-8）ヨセフは、「お兄さんたちは、私をエジプトに売り飛ばしたが、私は頑張って、エジプトを治める者になりましたよ。」などとは言っていません。自分が今、ここにあるのは、「兄たち」のせいでも、「自分」の努力によってでもない、神の摂理によるのだと言っています。ヨセフは「神」を中心に物事を考え、行動しています。「神が…」と神を主語にして物事を考えているところに、ヨセフの神の摂理を信じる信仰が表われています。ヨセフのこの信仰は、一時的なものではなく、終生変わりませんでした。父ヤコブが亡くなった後も、ヨセフは兄弟たちに、「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」と言って、兄弟たちを慰め、優しく語りかけています（50:19-21）。ヨセフの物語は実に感動的で、ヨセフの忍耐や赦しから多くのことを教えられます。しかし、ヨセフの物語で忘れてはならないのは、神が摂理の神であるということです。神の摂理を知る者、神の目的を理解している者だけが、逆境の中で忍耐し、神を仰ぎ、人を赦すことができるのです。

私たちが、人生の目的を知り、それに従って生きることができるのは、神が私たちを目的をもって造ってくださったから、神が聖書によってその目的を示していてくださるから、神がこの世界と私たちの人生を目的に従って導いておられるからです。創造の神、啓示の神、摂理の神を知り、信じることが、人生の目的を自分のものとする第一歩なのです。今年の標語は「私たちは知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。」（ホセア 6:3）ですが、主なる神を知ることによってはじめて、私たちは、人生の意味や目的を見出すことができるのです。リック・ウォレンは、『人生の五つの目的』の二日目のデボーションで、「自分を理解するための唯一にして最も正確な方法は、神がどういうお方であって、私たちのために何をしてくださったのかを知ることである。」ということばを引用しています。神に目を向け、主を知ることによって、私たちは自分の本当の姿を知るのです。うぬぼれでも、卑下でもなく、神に造られた者としての自分のありのままの姿を知り、自分に与えられた人生の目的をつかみとることができるのです。主を知ることを追い求め、この主から人生の目的を示していただきましょう。

（祈り）

私たちの父なる神さま、私たちは、これから、教会をあげて、人生の目的を探求しようとしています。しかし、この探求は、あなたを離れては全く無意味なものとなってしまいます。私たちを造り、私たちに語りかけ、私たちを導いておられる主よ、私たちが、もっと思いをあなたに向け、さらにあなたを知り、私たちに与えられた人生の目的を見出すことができるよう、助けてください。私たちは、自分の力では、あなたが与えてくださった人生の目的を達成することはできません。しかし、あなたは、神を愛する者と共に働いて、ご自分の目的を推し進め、私たちを目的に向かって導いてくださるお方です。私たちはあなたを求めます。あなたを知ることを追い求めます。あなたを知るにつれ、私たちのうちに、人生の目的を確かなものとして

ください。主イエスのお名前で祈ります。

1/9/2005

ディスカションのために

1. **ヨセフは、彼が受けた苦しみをどのように受けとめましたか。あなたは、困難に出会った時、「なぜ、こんな困難があるのだろう」と、その原因を詮索しますか、それとも、「この困難は何のためだろうか」と、その目的を尋ね求めますか。**
2. **ヨセフが、苦しみに耐え、彼を苦しめた人々を赦すことができたのはなぜでしたか。**
3. **ヨセフは、神をどのようなお方として知っていましたか。あなたはどうですか。**

人生の導き

詩篇 139:17-24

139:17 神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。
139:18 それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。
139:19 神よ。どうか悪者を殺してください。血を流す者どもよ。私から離れて行け。
139:20 彼らはあなたに悪口を言い、あなたの敵は、みだりに御名を口にします。
139:21 主よ。私は、あなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。私は、あなたに立ち向かう者を忌みきらわないでしょうか。
139:22 私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の敵となりました。
139:23 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。
139:24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

先週、私たちは、神が私たちを目的をもってお造りになったこと、私たちに人生の目的を示しておられること、そして、私たちを目的に向かって導いておられるということを学びました。神が、私たちの人生を導いておられるというのは、私たちにとって、とても心強いことで、神の導きがあればこそ、私たちは、逆境の中でも忍耐することができ、また、希望を持つことができるのです。創世記にあるヨセフの物語は、神の導きを絵に描いたようなものです。父ヤコブの愛を一身に受けていたヨセフは、兄たちに妬まれて、エジプトに奴隷として売り飛ばされました。ヨセフは良い主人に見出され、その家のすべてを管理するようになったのですが、それも束の間、ヨセフは、無実の罪で牢獄に入れられてしまいました。しかし、ヨセフは、彼の人生がそこで終わってしまうことは決してない、神が、ヨセフに与えた人生の目的に向かって、かならず導いてくださるということを信じました。神が、その人の人生に目的を持っておられることを知っている人、神が、その目的に向かって、人生を導くお方であることを信じる者は、苦しみにあっても簡単にはへこたれません。ローマ 5:3-4 に「患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す」とあるように、ヨセフは、患難から忍耐を学び、忍耐から品性を育て、品性から希望を引き出すことができました。そして、ヨセフは、神の民イスラエルを、飢饉から救う者になり、ヨセフは彼の人生の目的に導かれていったのです。ヨセフのように、人生を神に導かれて生きる人は幸いです。神は、昔も今も、変わらず、私たちの人生を導いてくださるお方です。しかし、私たちは、私たちの人生に、神の導きを見ながら進んでいるでしょうか。神に、人生の導きを求めながら歩んでいるでしょうか。「神の導き」というのは、大きなテーマで、短い時間で、すべてを語ることはできませんので、今朝は、私たちが神の導きを得るために必要な、みことばと祈りのことに的を絞ってお話ししたいと思います。

一、人生の導きと聖書

先週学びましたように、人生の目的は、決して自分で作り出すものでも、長年の思索を積み

重ねてやっと得られるというものでもなく、それは、神から与えられるものです。神はそれを聖書の中に示しておられ、誰でも、謙虚に聖書を学ぶならそれを見出すことができます。そして、人生の目的が聖書に示されているように、人生の導きもまた聖書の中に示されています。聖書を神のことばとして読む人、聖書を神の語りかけとして聞く人は、聖書によって、神の導きを知ることができます。

しかし、聖書によって、神の導きを知ると言っても、それは、聖書を占いの本のように使うということではありません。ある人が借金に困っていて、どうしようかと考えあぐね、聖書を開いて、一番はじめに目に飛び込んできたことばのとおりにやってみようと決心しました。それで、目をつむって、「えい、ヤー」と開いたのが、新約聖書の 54 ページでした。そのページの一番最初に、それはイスカリオテのユダのことですが、「そして、外に出て行って、首をつった。」（マタイ 27:5）とありました。その人は、「とんでもない。私はまだ死にたくない。」と言って、もう一度聖書を開き直すことにしました。やはり、目をつむって開いたのは、新約聖書の 190 ページでした。前の時はページの最初に目をやったのが良くなかったと思って、今度は、二段になっている本文の下の段を、わざと見るようにしました。すると、そこには「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」（ヨハネ 13:27）とありました！　この話はひとつのジョークなのでしょうが、私たちも、そんなふうに、おまじないのように聖書を開いたり、自分に好きな聖書のことばだけを拾い読みして、聖書を自分に都合のよいように解釈してはいないだろうかと注意したいものです。

聖書を正しく読み、そこから導きを得るためには、二つのことを心がけるのが良いと思います。第一は、聖書の全体を読むということです。新約だけ、旧約だけというのではなく、旧約も、新約も両方が聖書なのですから、両方を読む必要があります。聖アウグスティヌスが「新約は旧約の中に隠され、旧約は新約によって解き明かされる。」と言ったように、旧約だけを読んでも、聖書は謎で終わってしまいますし、旧約を読まないで新約だけ読んでも、新約の意味を正しく理解することはできません。聖書は、全部で 66 の書物から成り立っており、旧約は 929 章、新約は 260 章、合計 1189 章に分かれています。こんなに厚い聖書を全部読むのは大変なことのように見えますが、新約を毎日 1 章、旧約を 3 章読めば、一年で全部読んでしまうことができます。私は、聖書を朗読したテープを持っているのですが、90 分テープで 48 巻あります。ということは、全部で 72 時間ということですから、声を出してゆっくり読んでも、丸三日で聖書を全部読むことができるということになります。聖書全体を通して読むことを「通読」と言いますが、サンタクララ教会には二年間で聖書を通読するプログラムがあります。創世記から読みはじめたばかりで、まだまだキャッチアップできますので、ぜひ、これにご参加ください。

聖書を読むもうひとつの方法は、中心から周辺に向かって読むという方法です。聖書のどの部分も大切なものであり、いらないものはないのですが、やはり、核になる部分、骨組みになる部分はあります。主イエスが「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」（ヨハネ 5:39）と言われたように、聖書は、イエス・キリストが中心ですので、イエス・キリストがどのようなお方なのか、キリストの十字架と復活にどんな意味があるのか、なぜキリストの再臨が必要なのかなどをまず学んでおく必要があります。基本的な聖書の知識をしっかり身につけていないと、

豊かな聖書の世界を探険していくことはできません。いきなり聖書の世界に飛び込んでも、そこで迷子になってしまいます。私たちが、初めてどこかに行く時には、地図で最初に大きなハイウェーを見つけてから、小さな住宅地の道を見つけるようにしますね。そのように、私たちも聖書を学ぶ時には、聖書に道筋をつけておき、まずは大通りから入っていって、次に枝の道に入っていくという方法をとるのが良いのです。この聖書の「道筋」にあたるものが「教理」の学びです。教会は、その二千年の歴史の中で、「使徒信条」などの信仰告白や、数多くの「教理問答」などを生み出してきましたが、そうしたものに導かれ、聖書の中心的なもの、基本の骨組みを、日曜日や水曜日の聖書クラスでしっかりと身につけていただきたいと思います。

イザヤ 30:21 に「あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから『これが道だ。これに歩め。』と言うことばを聞く。」と、神が絶えず私たちに語りかけながら私たちの人生を導いてくださるとの約束があります。しかし、多くの場合、神は、いきなり天からみことばを響き渡らせて私たちに語りかけられることはありません。神の声は、私たちが普段から、聖書を読み、聖書に耳を傾けることの中に聞こえてくるものなのです。神の導きを求める人は、聖書のメッセージに耳を傾け、たゆみなく聖書を読み、熱心に学びます。導きを求めることと、みことばを求めることは同じことです。さらにみことばを求め続けましょう。

二、人生の導きと祈り

人生の導きを得、それを知る第二の方法は祈ることです。祈りが無ければ導きはありません。現代は、祈りを妨げるものが多くあって、祈りがとても貧弱になりました。とても残念なことですが、多くの人々にとって、祈りは、食事やミーティングの始めの合図でしかなくなっています。教会は「祈りの家」と呼ばれるのに、教会で一番人気のない集会が「祈祷会」なのです。

また、たとえ、個人で毎日祈りの時間を持っていても、また、祈祷会を守っていても、その祈りが形式的なものになってしまっていては、そのような祈りによっては、神の導きを得ることはできません。私たちが、神に対して悔い改めることも、新しいことを期待することも、自らをささげることもしないなら、神の導きは必要ないからです。『人生を導く５つの目的』の中でリック・ウォレンは、私たちは、自分たちのコンフォタブル・ゾーンに閉じこもっていないだろうかと言っています。もし、私たちが、自分でマネージできる範囲の、自分の世界の中にいれば、なるほど、居心地は良いかもしれませんが、そこでは、神の導きを求める必要もなく、また、神のみわざを体験することもないでしょう。

それでは、がむしゃらに、何かにチャレンジして、それを達成すればよいのでしょうか。それもまた、神に導かれる人生、祈りによって導かれる人生とは違います。私たちは、それぞれにゴールを設定しそれに到達しようとします。またさまざまなプロジェクトを立てて、それを達成しようとします。しかし、それは、本当に神を喜ばせることなのでしょうか。自分を喜ばせるだけのものではないのでしょうか。さまざまなゴールや、プロジェクトの背後に、それを超えた、もっと大切な「人生の目的」があるのではないでしょうか。教会は、人々の目をそこに向けさせるところであり、クリスチャンはそれを追い求める人々ではないのでしょうか。『人生を導く５つの目的』には、礼拝、交わり、弟子訓練、奉仕、伝道という具体的なものが教えられてはいますが、しかし、そこでは、それらの背後にあるもの、つまり、ほんとうに神

をあがめるこころ、神の家族を愛する思い、キリストのようになりたいという願い、しもべとなって仕えるという態度、キリストを伝えたいという情熱がさらに大切なこととして教えられています。もし、私たちが、目に見えるゴールに到達すること、プロジェクトを完成させることを、「目的」にしてしまうなら、私たちは、年中、活動においまくられるようになってしまうでしょう。教会でも、この世と同じように、あらゆることが数字で、量で量られ、効率がすべてになってしまうでしょう。礼拝よりも慈善事業を、交わりよりも社会活動を、キリストのごとくなるよりも政治活動を、ということになってしまいます。極端に聞こえるかもしれませんが、私がこう言うのは、実際、そのように考え、行動している教会がどんどん増えているからです。アメリカにはこんなに数多くの教会があるのに、人々がどんどん信仰から離れているのは、教会がその目的を見失っているからではないかと思います。私たちも、私たちの教会も、その目的から離れてさまようことがないようにと、心から願っています。

人生の導きを求めるには、まず、自分の計画を捨て、自分の努力を捨てることを学ばなければなりません。多くの人は、祈るよりも先に計画書を書き出します。神に導きを求めるよりも、「ああして、こうして、この人を説得して、あの人から賛成をとりつけて」とストラテジーを練ります。しかし、自分の計画が先に来て、自分の努力でフォローするのなら、そこには、神の導きや祈りが入ってくる余地はなくなってしまいます。計画を立てる前も、また、計画を立ててからも、よくよく祈り、立てた計画をも神にお任せして、神の働きを期待するのが、神の導きに生きる人の姿です。よく、使われる英語に "ASAP" という略語があります。これは "As Soon As Possible" の略語で、私は、Eメールなどで、しょっちゅう、このように催促され、急かされています。この言葉にちょっと嫌気がさしていたのですが、最近、いいことを聞きました。"ASAP" は "Always Say A Prayer" の略語だというのです。「いつも祈りなさい。」「早く、早く」とせきたてられる社会に生きて、その流れの中に流されている私たちに、本当に必要なのは、祈りです。祈りがなければ私たちは神の導きを見失ってしまいます。

聖書は「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」（箴言 3:5-6）と教えています。たとえ、物事が予定通りにいかなくても、神の導きに任せながら生きる人は、そのことで慌てたり、ふてくされたり、がっかりしたりはしません。神の導きを祈り求めている人は、神が、私たちの願いや計画にまさって素晴らしいことをしてくださるということを知り、さらに神を賛美し、より深く神に信頼することができるようになるのです。

神は、ご自分の計画を、ご自分の思いのままに推し進めることのできるお方です。しかし、神は、私たちを無理矢理に神のご計画に従わせるようなことはなさいません。神は、私たちが神の計画を知り、神の導きに身を任せ、神に信頼しながら神と共に、神のご計画のために働くことを願っておられます。神のご計画、神の思いを知ることは、とても大切なことなのですが、聖書は、私たちは、神の思い、ご計画のすべてを理解することはできないと言っています。神は「全知」のお方ですから、私たちのすべてを知っておられます。しかし、私たちは、限りある者で、神のすべてを知ってはいないのです。今朝の聖書、詩篇 139 篇にも、神がすべてを知っておられることについて 1～16 節で歌った後、「神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。」（詩篇

139:17-18）とあります。では、神の思いは、私たち人間から遠く離れていて、私たちは、それを全く知ることはできないのでしょうか。決してそうではありません。もし、そうだとしたら、私たちは、神の導きを知ることはできません。神の導きを知るとは、神のみ思いを知るということなのですから。では、どのようにして、私たちは神の思いと一つになることができるのでしょうか。

19 節から読んでいきますと、この詩篇の調子が急に変わっていることに気付きます。「神よ。どうか悪者を殺してください。血を流す者どもよ。私から離れて行け。彼らはあなたに悪口を言い、あなたの敵は、みだりに御名を口にします。主よ。私は、あなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。私は、あなたに立ち向かう者を忌みきらわないでしょうか。私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の敵となりました。」（詩篇 139:19-22）と言って、ダビデは突然、「悪者」たちを責めはじめます。そして、彼らに対する憎しみをあらわにします。聖書は、人を愛するように教えているのに、ダビデの口からどうしてこんなことばが出てくるのだろうと、不思議に思いますね。主イエスは「敵を愛せよ。」と言われたのに、ダビデは「私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。」と言っています。ここで、注意したいのは、ここでの「敵」は、ダビデが個人的に憎んでいた人々ではないということです。それは「あなたの敵」と言われているように、神に敵対する者たち、神を憎む者たちのことを指しています。ダビデは、ここで自分の敵をのろっているのではなく、神の敵をのろい、そして、神の敵を自分の敵にしているのです。真理を愛する者は、偽りを憎みます。善を愛する者は、悪を憎みます。神を愛する者は、神が喜ぶものを喜び、神が嫌うものを嫌います。19-22 節のことばは、ダビデがそれほどまでに神を愛するゆえに、神を憎む者を憎むと言っているのです。ダビデは 22 節で、「彼らは私の敵となりました。」と言っています。私たちは誰も、「敵」をつくりたくはありません。わざわざ「敵」を増やしたい人も、誰もないでしょう。しかし、ダビデは「私が神を愛することによって、人々が私の敵なるのなら、それでもよい。」と、本気で考えたのです。このことばは、ダビデがそれほどに神を愛しているということを言い表わしたものです。彼のまごころからの、ひたむきな神への愛の告白なのです。ダビデは、けっして完全な人ではなく、大きな失敗をも犯した人です。しかし、彼が、他の誰にも勝って神に愛された人と呼ばれるのは、このような、神への愛を持っていたからでした。ダビデは、この愛によって、神を知り、神のお心を知ったのでした。

ダビデは 23-24 節で「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」と祈りました。ダビデは、この詩篇の第 1 節で「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。」と言っています。神が、ダビデのすべてを知っておられるのに、なぜ、ダビデは「神よ。私を探り、私の心を知ってください。」と祈る必要があったのでしょうか。「神の全知」という「理論」だけしか知らない人にはその答えは分からないでしょう。しかし、生きておられる神を知っている人、神に愛され、神を愛する人には、その答えは分かります。ダビデは、神がダビデのすべてを愛をもって知っていてくださる、この愛の神に、自分のすべてを知っていただきたいと、愛のゆえに、自分の心を開いているのです。その時、神のおこころと、私たちの心が不思議なかたちでひとつになっていきます。神を知識では知り尽くすことができなくても、神を愛によってとらえることができます。このような、神との人格と人格との交わり、神に愛され、神を愛する愛の交わりの中で、私たちは、神のみこころを知り、

神の導きを知るのです。そのように、神の導き求め、神の導きを知る、私たちの人生でありたいと、心から願います。

（祈り）

父なる神さま、あなたが私たちに求めておられる人生が、あなたからの課題をこなしてそれを達成するだけの人生ではなく、あなたに導かれ、あなたと共に、目的に向かって歩んでいく人生であることを、今朝、深く教えられました。それは、今まで私たちが生きてきた生き方と大きく違っていますし、私たちの回りの人々が期待することも違っています。そのことに戸惑っている人々には、神に導かれて生きる人生の素晴らしさを教えてください。古い生き方に囚われている人々には、そこから一歩踏み出す勇気を与えてください。神の導きを求めて歩んでいる人々には、さらに確かな導きを、みことばと、祈りによって与えてください。主イエスのお名前で祈ります。

1/16/2005

ディスカションのために

1. あなたは聖書を通読したことがありますか。通読によってどんな恵みを得ましたか。
2. 聖書の教理の学びをしたことがありますか。それによってどんな発見がありましたか。
3. 自分の立てた計画と神の導きが違っていたことがありますか。そんな時、どうしましたか。

神との友情

ヨハネ 15:13-15

15:13 人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。
15:14 わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。
15:15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。

宮本武蔵は『五輪の書』というものを書いて、その中で「神仏は敬して頼らず。」ということばを残しています。「神や仏は、敬いこそすれ、決して心をゆるして頼るものではない。頼れるのは、自分の腕だけである。」という意味なのでしょう。このことばは、日本人の宗教観をよく表わしていると思います。日本には至るところに神社仏閣があり、初詣には大勢の人が繰り出します。各家庭にも神棚や仏壇があり、毎日、灯明がともされ、ご飯が備えられたりします。神仏が大切にされているようなのですが、それは、形式や儀式だけで、実際の生活の中では、神々を意識し、仏の教えに従うということが、ほとんどありません。神や仏は神社や神棚、寺院や仏壇の中にだけいるもので、自分たちとは距離のある遠い存在であると思っています。それで、聖書が、「神が私たちを目の中に入れても痛くないほどに愛しておられる。」（申命記 32:10）、「私たちは、神を恋焦がれる。」（詩篇 84:2）などと言う時、そうしたことばをすぐには理解できないのです。神との関係がとても薄いからなのでしょう。また、クリスチャンの間でも、儀式や形式を守ることが信仰を持つことで、教会で忙しく活動することが、信仰を深めることだという思い違いが出てくるのだろうと思います。もちろん、儀式や形式のすべてが悪いわけでも、また教会での奉仕活動が不必要というわけでもありません。しかし、信仰とは本来、神に愛され、神を愛することであり、信仰を深めるとは、神との関係を深めることであるはずです。このことは、アメリカのクリスチャンにとってはあたりまえのことであっても、日本人クリスチャンには、このことがよく分かっていない場合が多いようです。聖書は、神と神を信じる者たちとの関係、キリストとクリスチャンとの関係がどんなものかを、さまざまな比喩を使って、わかりやすく描いていますので、それによって、私たちも神との関係に目覚め、神との関係を深めることが出来るのではないかと思います。

一、花婿と花嫁

キリストとクリスチャンの関係は、聖書の中でさまざまに描かれていますが、ヨハネの福音書には、四つの面から、キリストとクリスチャンの関係が、四つの面から示されています。その第一は、ヨハネ 3:28-30 にあります。「あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前に遣わされた者である。』と私が言ったことの証人です。花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」これは、キリストの先駆者となったバプテスマのヨハネのことばです。バプテスマのヨハネは、「キリストは花婿で、キリストを信じる者たちはその花嫁である。自分は、キリストでも花婿

でもない。花婿の友人であって、花婿であるキリストこそ注目を浴び、栄光を受けなければならない。」と言っているのですが、キリストが花婿であり、クリスチャンが花嫁であるというのは、キリストとクリスチャンとの関係がどんなに深いものかを、みごとに言い表わしています。キリストとクリスチャンとの関係は、夫が他の誰よりも妻を愛するように、キリストがひたすらな愛でクリスチャンを愛してくださり、また、妻が他のすべてのものをさしおいて夫を愛するように、クリスチャンが献身的な愛でキリストを愛するという、愛の関係なのです。しかも聖書は、「花婿」「花嫁」という言葉を使って、キリストとクリスチャンとを新婚の夫婦として描いています。夫婦の愛というものは、何年経っても変わらないもの、変わってはならないものですが、新婚の夫婦には、熟年の夫婦にはない、新鮮さというものがありますね。キリストとクリスチャンが「花婿」と「花嫁」の関係に譬えられているのは、キリストに愛され、キリストを愛することの中にはいつも新鮮な喜びがあり、感動があることを教えています。私たちが、キリストの愛から離れて、その新鮮な喜びや感動を忘れる時、キリストは、黙示録にあるように「あなたは初めの愛から離れてしまった。」(黙示録 2:4) と嘆かれることでしょう。主の愛を覚えて「主よ、あなたを愛します。」と、キリストへの愛を言い表わす私たちでありましょう。

二、羊飼いと羊

第二に、キリストは羊飼いでクリスチャンは羊です。ヨハネ 10:11 と 10:14 で、キリストが「私は良い牧者です。」と言っておられるように、キリストは私たちを導き守ってくださるお方です。羊は、とても迷いやすい動物で、羊には羊飼いの導きが必要です。また、羊は、とても弱い動物で、自分を守るための角も、牙も、早く走ることのできる脚も持っていません。ですから、羊には羊飼いの守りが必要なのです。人間は、羊のように弱く、迷いやすいものですから、神に頼り、従えば良いのですが、人間は、同時に、羊のようにわがままで、自分の知恵や力を過信して、傲慢にも神に逆らい、神の牧場から飛び出してしまいました。イザヤ 53:6 にあるように、「私たちはみな、羊のようにさまよい、おののおの、自分勝手な道に向かって行った。」のです。しかし、キリストは、神のもとから迷い出でいる者たちを、神の牧場に連れ戻す羊飼いとなってくださいました。ペテロ第一 2:25 に「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」とある通りです。

しかし、「羊飼い」と「羊」のたとえは、単に、キリストが私たちを導く者で、私たちがキリストに従う者という以上のことを教えています。イザヤ 53:6 に「私たちはみな、羊のようにさまよい、おののおの、自分勝手な道に向かって行った。」とありましたが、そのすぐ後に「しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」とあります。ペテロ第一 2:25 のすぐ前、24 節には「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」とあります。神に逆らい、真理から迷い出た者たちのために、キリストは身代わりの刑罰を受け、十字架の苦しみを味わったのです。キリストは羊のために命を捨てた羊飼いです。ですから、キリストは「わたしは、良い牧者です。」と言った後、必ず「良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」（ヨハネ 10:11）と言い、「わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」（ヨハネ 10:15）と言われたのです。

詩篇 23 篇は、羊飼いである神への信頼を歌った歌ですが、その中に「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。」とあります。私は、この箇所の中に、文字通り死の陰を通り、犠牲の羊となってくださったキリストの姿を見ます。そして、復活された勝利のキリストを覚えます。「羊飼い」と「羊」というたとえには、キリストが私たちを贖い、私たちがその贖いの中に生かされているという、キリストとクリスチャンとの深い関係が描かれています。クリスチャンの、キリストに対する関係は、羊飼いであるキリストの導きに従う、その守りの中に憩うというだけでなく、私たちのために命をささげてくださった、キリストの命がけの愛を、いつも心に留め、そのことに深く感謝するものなのです。

三、ぶどうの木とその枝

キリストとクリスチャンの関係をあらわす第三のものは、「ぶどうの木とその枝」というたとえです。ヨハネ 15:5 で、キリストは「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。」と言われました。このたとえは、キリストとクリスチャンの関係が、いのちの関係であり、切っても切れない関係であることを表わしています。ぶどうの枝が、ぶどうの木から養分を得て育てられるように、私たちは、キリストのいのちによって生かされています。クリスチャンにとって、キリストは、あれば良いが、なくてもかまわないというようなアクセサリーのような存在ではありません。ぶどうの枝がその幹から切り取られたら、あとは枯れてしまうだけであるように、クリスチャンから、キリストを取り去ったら、それはもはや「もぬけの殻」です。どんなに長年の教会のメンバーであったとしても、多くの聖書の知識を持っていたとしても、また、教会で忙しく立ち働いていたとしても、キリストを内側に持っていなければ、キリストのいのちによって生かされていなければ、そして、神のために実を結んでいなければ、その人を「クリスチャン」と呼ぶことはできません。「クリスチャン」というのは、私がたびたび申し上げますように、「キリストの者」という意味であって、「キリスト教信者」という意味ではないからです。いわゆる「クリスチャンらしい」という、見かけの立派さが人をクリスチャンにするのではありません。クリスチャンとは、キリストの側から言えば、キリストが捕らえて離さない人のことですが、人間の側から言えば、キリストから離れては何もできないことを自覚して、キリストにくらいつて離れない人のことを言います。私たちとキリストとの関係が、このように、切っても切り離せない、いのちの関係であることを、私たちは、どれほど深く自覚しているでしょうか。聖書が教えるように、また、キリストのことばのとおりに、キリストと自分との関係をきちんととらえている人は、幸いだと思います。

四、友と友

キリストとクリスチャンとの関係は、ヨハネの福音書の 3 章で「花婿と花嫁」、10 章で「羊飼いと羊」、15：5 で「ぶどうの木とその枝」として描かれていました。どれも、キリストとクリスチャンとの親密な関係を表わしていますが、ヨハネの福音書には、もうひとつのたとえがあります。ヨハネ 15:15 に「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」とあるように、キリストがクリスチ

ャンの「友」であり、クリスチャンもまたキリストの「友」であるというものです。ここで使われている「友」は、たんなる知り合いでも、「お友だち」でもなく、どんなことでも打ち明けることのできる「親友」という意味で使われています。聖歌には、「つみとがをにのう友なるイエスに」「ああイエスきみこよなき友よ」「世には良き友もかずあれど」など、イエス・キリストが私たちの友であることを歌った歌が数多くありますが、そのどれもが、キリストが、私たちの状況のすべてを知り、理解してくれる「友」であり、「親友」であるということが歌われています。キリストが私たちの「友」であるということは、とても心強いことで、皆さんもいろんなおりに、キリストが「友」であることを感じながら、信仰の歩みをしてきたことと思います。特に、正しいことを主張しても誰からも認めてもらえなかったり、理解してもらえなかった時などは、キリストが友であるということは、私たちの深い慰めとなり、私たちの歩みを支える大きな力となったことと思います。

キリストが私たちの友であることは、誰にも分かりやすいことですが、私たちがキリストの友であるということは、あまりよく理解されていないように思います。今まで見てきた三つの比喩、「花婿と花嫁」「羊飼いと羊」「ぶどうの木とその枝」では、一方が主であり、一方はそれに従うものでした。花婿は花嫁のかしらであり、花嫁は花婿に従います。羊飼いは羊の先頭に立ち、羊は羊飼いについていきます。ぶどうの木は、ぶどうの枝を支えており、ぶどうの枝はぶどうの木に依存しています。ところが、四番目の比喩では、キリストもクリスチャンも、どちらも「友」です。ここでは、キリストと私たちとが対等に扱われているのです。キリストは私たちの主であり、私たちはキリストのしもべであるという立場は、変わることはないのですが、キリストは、私たちをたんなるしもべとしてではなく、友として扱ってくるださるというのです。「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。」というのは、キリストが私たちを、対等の愛で愛してくださっていることを示しています。

キリストの愛が対等の愛であるというのは、ヨハネ 15:13 によく表われています。キリストは「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」（ヨハネ 15:13）と言いました。「親が子ためにいのちを捨てる」や「子が親のためにいのちを捨てる」ではなく、なぜ、「友のために」なのでしょうか。今も昔も、親が子のために、子が親のために大きな犠牲を払う、夫が妻のために、妻が夫のために危険を犯してまで相手を守るということは良くあることで、そうした親子の愛や夫婦の愛は賞讃されるべきものです。しかし、親子の愛や夫婦の愛には、血縁関係や肉親の強いきずなに基づいたもので、ある意味では狭いものです。しかし、「友のために」という時には、血のつながりも何もない人のために、自分を犠牲にするわけですから、その愛は、純粋で、大きなものであるということができます。皆さんは、肉親の誰かが大変困っている時には、少々の犠牲を払うことができても、友人であるというだけでは、大きな犠牲を払うことをためらうのではないでしょうか。人間の愛は、それがどんなに尊いものであっても、何かの制限や限界があるものです。しかし、キリストは、「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」とのことば通りに、キリストとは、縁もゆかりもなかった私たちを「友」として愛してくださったのです。血縁も地縁も、コネもツテも、そんなものの全くない、純粋な愛で、私たちのために命をささげてくださったのです。これ以上の愛、これ以外の対等の愛がどこにあるでしょうか。この愛によって私たちはキリストの友とされているのです。

ところで、しもべと友の違いは、いくらでもありますが、ひとつだけ挙げるとすれば、しもべは主人の思いを知らないが、友は、その友のこころを知っているということだと思います。主人は、しもべには命令を与えるだけで、決して自分の意見や感情を伝えはしません。まして、自分の悩みや秘密を打ち明けることはありません。職場でも、上司が部下に命令を下す時には、たとえその指示が良い結果をもたらす自信がなくても、それには触れないで、命令を下します。また、ビジネスの関係では、取引先に経営上の悩みを打ち明けたり、競争相手に自分が考えている経営上のアイデアを明らかにしたりはしません。そんなことをしたら、信用をなくしてしまったり、競争相手に先を越され、たちまち、ビジネスが成り立たなくなってしまいます。しかし、信頼のおける友には、これからしようとしていることや、今、どうしようかと思い悩んでいることを打ち明けます。それで、キリストも弟子たちに「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」と言われたのです。実際、キリストは、私たちに有無を言わさず命令に従わせることが出来るのに、最初の弟子たちにも、また、私たちにも、ご自分のしようとしていることを示して、私たちがそれをよく知り、納得した上で、キリストの計画に従うようにしてくださっています。神は、おひとりですべてを成し遂げることのできるお方です。主は誰にも相談する必要も、報告する必要もないお方です。「主はだれと相談して悟りを得られたのか。だれが公正の道筋を主に教えて、知識を授け、英知の道を知らせたのか。」（イザヤ 40:14）とある通りです。なのに、神が、あえて、私たちを友と呼んで、ご自分のご計画を知らせ、その思いを伝えようとしておられるのは、なんという大きな愛でしょうか。私たちは、神の友として何と大きな特権を与えられていることでしょうか。

神が、神を信じる者にそのお心を打ち明けられた実例は、創世記 18 章にあります。神が旅人の姿でアブラハムに現われ、ソドムの町に向って行かれた時、アブラハムもいっしょにソドムの町を見下ろす丘までやってきました。その時、神は、「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。アブラハムは必ず大いなる強い国民となり、地のすべての国々は、彼によって祝福される。」（創世記 18:17-18）と考えられました。そして、神はアブラハムに、神がソドムの町を滅ぼそうとしていることを告げました。それで、アブラハムは、ソドムの町にいる甥のロトとその家族のためにとりなしをする機会を得ました。アブラハムは聖書で「神の友」（ヤコブ 2:23）と呼ばれていますが、それは、神がアブラハムにご自分の計画を明らかにし、アブラハムが神に祈りをもって応答したことの中に見ることができるのです。

神は、私たちにもアブラハムのように「神の友」となることを願っておられます。神は、私たちが、神の目的を、計画を、導きを知るようにと、たえず、私たちにみことばをもって語りかけ、教え、導こうとしておられます。私たちは、神の良き友として、神の声に耳を傾け、神から学び、神の思いを知る者となっているでしょうか。韓国のチョー・ヨンギ師が、その本の中で、こんなことを書いていました。まだ開拓伝道をしていた時、奥さんに聞いてもらいたいことがあったので、「ちょっとこっちに来て、いっしょに座って話をしようよ。」と言ったところ、奥さんが「私は、一日中仕事をしてきたんですよ。家に帰ってきたら、帰ってきたで、掃除をし、洗濯をし、そして食事の仕度もしなければならないのよ。これは、みんなあなたのためなのよ。忙しくて、じっと座ってなんかいられません。」と答えたというのです。その時、チョー・ヨンギ師は、奥さんの態度にちょっと腹を立てましたが、すぐに思い直して、心の中

でこう祈ったそうです。「ああ、神さま、私は今、家内の忙しさを理解しないで、家内がなんて勝手なことを言うのだろうと思ってしまったことをお赦しください。神さま、私も、あなたが、私と語り合いたいを願っておられるのに、『私は忙しいのです。今は、時間がありません。私が忙しいのはみんなあなたのためなのですから、ご理解ください。』などと、あなたに答えてきました。そのことをお赦しください。神さま、あなたは、私と語り合いたいと望んでおられるのですね。あなたは、私が忙しくすることよりも、あなたに聞き、あなたに語りかけることのほうを何倍も喜んでくださることが、今、分かりました。」この祈りは、神の友となるために、神との友情を深めるために、私たちに出来る最善が何であるのかを良く教えています。私たちも同じように祈りながら、神との友情を深めていきたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、アブラハムを「友」と呼び、キリストもまた弟子たちを「友」と呼ばれました。もとは、神の敵であった者を、キリストのゆえに赦し、キリストにあって「友」と呼んで愛してくださっていることを、心から感謝いたします。あなたを求めておられるおひとりびとりが、あなたとの愛の関係に導かれますように、また、そこに導かれた者たちが、さらにあなたとの愛の関係を深めることができるように、あなたとの友情を深めることを、私たちの生活で第一のこととすることができますように、助けてください。私たちの友、イエス・キリストのお名前で祈ります。

1/23/2005

ディスカションのために

1. キリストとクリスチャンとの関係を描いた比喩で、一番好きなのはどれですか。それはなぜですか。
2. キリストがあなたの友であることを、最も良く意識するのはどんな時ですか。
3. キリストとの友情を、日々の生活の中でどのように表わすことができますか。

人生と永遠

ルカ 16:1-13

16:1 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。
16:2 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』
16:3 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしいし。
16:4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』
16:5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、
16:6 その人は、『油百バテ。』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい。』と言った。
16:7 それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル。』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。
16:8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。
16:9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。
16:10 小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。
16:11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。
16:12 また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。
16:13 しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

今日の礼拝プログラムには「目的の四十日・全教会キックオフ集会」のフライヤーが入っています。キックオフ集会はいよいよ来週の土曜日となりました。「目的の四十日」というのは、神が私たちに与えてくださった人生の目的を探求し、また、再確認するため、四十日のデボーションをみんなで守ろうとというものです。四十日は、短いようで長いので、ひとりでは、最後までやり遂げることができないかもしれません。それで、デボーションの手引きとして使う『人生を導く５つの目的』本にもあるように、まずは、デボーションを互いに励まし合う「パートナー」を選びます。パートナーとは週に一度、その週に学んだことを分かち合い、一緒に祈ります。顔を合わせることができれば良いのですが、もし無理なら、電話で祈り合うこともできます。サンデースクールの成人クラスや、水曜日の JOD 、夕の祈り会では、ワークブックを使ってスモールグループ・ディスカションをしています。こうした集まりに出ることがで

きない場合は、英語部のスモールグループに参加したり、数家族でホーム・ミーティングをすることもできます。くわしくはキックオフ集会で説明がありますので、出席してください。もう『５つの目的』の本は受取りましたか。パートナーは決まりましたか。来週土曜日のキックオフ集会のためにスケジュールを空けてあるでしょうか。キックオフ集会は、スタッフのためのものでも、英語部のためのものでもありません。これは、全教会の集まりです。日英両語部で有意義な時を過ごしましょう。

一、人生と永遠

さて、今月の礼拝では、『人生の５つの目的』の第１日目から７日目の主題の中からお話ししてきましたが、今日は「人生と永遠」という主題でお話しします。リック・ウォレン師は「この地上の人生だけがすべてではありません。」（４日目）と言っています。クリスチャンには、永遠があるのです。この世を去った後、私たちは、神の国で神と共に永遠を過ごすのです。その時、私たちが地上で過ごした人生の結果を見るのです。地上でどんなに立派な業績があったとしても、それが、自分のためであって神のためでなかったなら、天ではどんな報いもないでしょう。地上でどんなに財産を築き上げても、それを神のために用いなかったら、天では受け継ぐべきものは何もないでしょう。けれども、たとえ、地上では誰に知られなくても、神のために心を込めてしたことは、天では大きな報いとなって、私たちに返ってくるのです。とりわけ、キリストに従うために味わった苦しみや、痛みなどは、天ではその何倍もの喜びとなって報われるのです。

もし、人生が死んで終わりだとしたら、人生の目的を探求すること自体が無意味なものとなってしまいます。もし、死によってすべてが終わるのなら、「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしょうではないか。」（コリント第一 15:32）と言うことになります。『５つの目的』で、著者は「もし、この地上で過ごす時間が人生のすべてであると言うなら、さっさと使い切ってしまうことをお勧めします。誠実に、正しく生きようなどと考える必要はありません。人生の結末など気にせず、好き勝手、やりたい放題にすればよいのです。あなたの行動は、長期的には何の意味も持たないのですから。」と言っています。確かに、消えてなくなってしまうもののために苦労する必要などないからです。

しかし、人生は死んで終わりではありません。死後の世界、永遠の世界があるのです。死後の世界や永遠の世界というのは、人間の想像力によって作り出されたものではありません。それは、事実です。神が永遠の存在であるのに、永遠の世界がないということがあるでしょうか。キリストが死んで、葬られ、死者の世界に降りて行き、そこから復活されたのに、死後の世界がない、永遠のいのちがないということはありえないのです。キリストを信じる者には、すでに永遠のいのちが与えられており、その国籍は天にあって、世を去った後、永遠の神とともに、永遠の神の国で永遠を過ごすのです。

聖書は、死後の世界ついて事細かに書いてはいませんし、永遠の神の国についても、ヨハネの黙示録にあるように、象徴的なことばでしか書かれていません。しかし、キリストにある者が、死後、キリストとともにあることは、確かなこととして約束されています。この約束さえあれば、そのことさえ分かっていれば、他は、今知る必要はないと思います。そもそも、永遠

の世界は、人間のことばでは、それをすべて描くことはできないのです。それをしようとしたら、さらに何冊分もの聖書を神に書いていただかなければならなくなるでしょうし、それを読んで理解できる人もほとんどないでしょう。永遠の世界について、大切なことは、それを理解することではなく、信じることです。永遠の世界は、理解するものではなく、体験するものだからです。「信じる」と言っても、もちろん、私たちは、やみくもに信じているのではありません。私たちは、キリストの復活という、確かな証拠を持っています。キリストの復活は、死後の世界の証拠であり、永遠のいのちの保証です。聖書が言うように、神は、人間に永遠を思う思いを与えてくださいました。目に見える地上のものだけでなく、目に見えない永遠のものを見る信仰を与えてくださいました。永遠から人生を見る時、はじめて、私たちは人生に意味と、目的を見出すことができるのです。そして、「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしょうではないか。」というなげやりな生き方でなく、「堅く立って、動かされることなく、主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」（コリント第一 15:58）との教えの通りに生きることができるようになるのです。

二、永遠への準備

では、私たちの人生が地上のものだけでなく、永遠につながっているものなら、私たちは、どのような心構えでいれば良いのでしょうか。さまざまなことがあげられると思いますが、一番大切なことは、今の時を生かして永遠に備えるということです。今朝のキリストのたとえ話は、私たちにそのことを教えてくれます。

このたとえ話には、金持ちの主人と、その家の管理人、そして、金持ちの主人から油や麦などを借りていた人々が登場します。金持ちの家には、たいてい管理人がいて、その家の財産を守り、増やす責任を与えられていました。ところが、この管理人は、主人の財産を増やすどころか、乱費し、浪費していたのです。最近の日本では、企業や官庁などで、経理担当者が会社の金や官庁の予算を着服する事件が後を絶たないそうですが、この管理人は、悪意があって乱費していたわけではなかったようです。もしそうなら、主人にばれないように、うまくやったことでしょう。この管理人は、管理人は向かない性格で、何ごとおおざっぱで、節約すべきところで、大盤振る舞いをしたり、人々の言うがままにお金を払っていたのかもしれません。

この管理人のしていることを知った主人は、彼に「おまえは首だ。」と言い渡しました。それで、彼は管理人は困り果ててしましました。しかし、これからどうしようかと考えあぐねた末、ある名案を思いつきました。彼は、主人から借りのある人たちをひとりひとり呼び出し、借用証書の借りを少ないように書き換えさせたのです。たとば、「油百樽」とあれば「五十樽」に、「小麦百袋」とあれば「八十袋」というふうにです。彼は、主人の財産を乱費したため主人から辞めさせられるのに、その間際に、さらに主人の財産を乱費したのです。なぜ、彼は、こんなとんでもないことをしたのでしょうか。主人を恨んで、仕返しをしてやろうと思ったのでしょうか。それとも、主人から借りのある人たちをかわいそうに思ってでしょうか。そうではありません。主人から借りのある人たちに恩を売って、首になった後、その人たちの世話になろうとしたのです。恩を売った人が 50 人いたら、一週間づつ、ひとりひとりの家に転がり込んで世話になれば、一年は、食べるのに困らないだろうと考えたのでしょう。この管理人は、自分の腹を少しも痛めずに、辞めさせられた後の生活の保障を得たのです。

私は、さきほど、「今朝のたとえ話は、私たちに大切なことを教えている。」と言いましたが、このたとえ話の管理人は、真面目に仕事をしなかったばかりか、ずるいやり方をして自分を守ろうとしました。イエスは、私たちに不真面目で、ずるくあれと教えているのでしょうか。決してそうではありませんね。「この世の子ら」と呼ばれている人々は、この管理人の彼の抜け目のなさを学ぶかもしれませんが、「光の子ら」と呼ばれているクリスチャンは、もっと他のことを学ぶのです。

第一に、彼が、自分の将来に危機感を持ったことです。彼には、その仕事をやめさせられても食べていく蓄えはありませんでした。この管理人は、主人から「会計報告を出しなさい。」と言われた時、はたと困って「土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしい。」と言いました。これは、「肉体労働は、きついし、さりとて、こじきをするのもいやだ。仕事をやめさせられたら、どうやって食べていこうか。」という意味なのですが、私は、これは、なかなかの名文句だなあと、いつも感心しているのですが、同時に、このことばの中に、この管理人が正直に自分の限界を認めている姿を見ます。私たちの多くは、「永遠に備える」ということが大切なことを知っていますが、さして危機感を持ってはいません。今、信仰を持たなくても、今、悔い改めなくても、そのうちなんとかなるだろうと、安易に考えてしまいやすいのです。また、自分は健康だ、能力がある、財産もあるなどと、自分の力に頼ってしまうのです。しかし、財産も、健康も、能力も、それ自体が私たちに、神と共なる永遠を保証するのではありません。人間は、みずからのうちに永遠を保証するものを何ひとつ持っていないのです。私たちも、この管理人のように、今の自分に永遠を保証するものが何もないことを悟って、永遠に備えなければならないのです。

次に学ぶべきことは、この管理人が、自分にではなく、友に頼ったことです。この管理人は、今のうちにできるだけたくさん、自分の友を作っておいて、その友の世話になろうとしました。イエスは、この管理人を例にあげて、弟子たちにも「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」(9 節)と言いました。ここで使われている「不正の富」というのは、不正な手段で得た富という意味ではありません。11 節にこの言葉がくり返し出て来るように、これは、地上の、消えて行く富のことです。永遠に残る、霊的な富、まことの富との比較で、このように言われているのです。地上のものを、天のもののために、どのように用いるか、一時的なものを永遠のためにどう生かすかは、後で触れますが、今は、「自分のために友をつくりなさい。」ということばに注目しましょう。ここでの「友」という言葉は、管理人が大勢の債務者を味方につけたこととの関連で使われているので、複数になっていますが、私たちを永遠の住まいに迎え入れてくれるのは、ただひとりの「友」です。たとえ、天国にたくさんのクリスチャンの友だちがいたとしても、彼らには、あなたを永遠の住まいに迎え入れる力はありません。それができるのはイエス・キリストだけです。キリストを「友」とし、キリストに頼り、キリストとの友情のきずなの中に生きる時、私たちは、私たちを迎えてくれるお方を天に持つことができるのです。

リック・ウォレン師は、三日目のデボーションで、私たちが永遠をどう過ごすかは、神からの二つの質問にどう答えるかにかかっていると言っています。その第一の質問は、「わたしの

ひとり子、イエス・キリストに対してあなたはどのような態度を取りましたか。」です。キリストを救い主として、あなたの心と人生に受け入れること、イエスを主として従うだけでなく、イエスを友とし、どんなことでもイエスに頼りながら歩むこと、これが、私たちが、神のひとり子イエス・キリストに対してできる最善のことです。こんな話しがあります。ある工場で、ある機械が動かなくなりました。それで、その機械を使っていた人は、いろいろと調べ、修理しようとしましたが、なかなか直りません。どうにもならなくなってから、その人は、技術者を呼びました。技術者が来て、すぐに機械は直りました。それで、その機械を使っていた人は、技術者に「私も、直そうと思って、最善を尽くしたのですけど…」と言いました。その時、その技術者は、こう言いました。「どうして、すぐ、私を呼ばなかったのですか。あなたの最善は、私を呼ぶことです。」この話しは、私たちの人生にも当てはまりますね。私たちは、キリストに頼ることを忘れ、自分の力でなんとかしようとして、かえって、物ごとを悪くしてしまうことがあります。そんな時、私たちもキリストに「どうして、わたしに祈らなかったのか。あなたの出来る最善は、わたしの助けを呼び求めることではなかったのか。」と言われることでしょう。自分の力で天によじ登ることのできる人はだれひとりありません。私たちを天に迎えてくださるキリストを、あなたは友としているでしょうか。

第三は、この管理人が、彼に任せられているものを、将来のために最大限生かしたということです。地上の財産も、健康も、能力も、それ自体は永遠を保証するものではありません。しかし、それを神のために生かして用いるなら、それは永遠のものにつながるものとなるのです。たとえば、財産のある人は、それを神のために思い切って捧げることによって、天に宝を積むことができます。また、時間のある人は、それを生かして、神のことばを読み、学ぶことに専念することができます。また、どんな人も、それぞれの能力を生かして、神のため、人のために奉仕することができます。多くの人と人間関係を持っている人は、それによって他の人々をキリストのもとに導くことができるでしょう。献金の額の大きさで天国の場所を買うことができる、知識の量で天国の鍵を手に入れることができる、奉仕の分量で神の恵みを勝ち取ることができるなどと考えるのは、全くの的はずれですが、自分に与えられた健康や、時間、財産、人間関係などを、自分のためにではなく、神のために使うことによって、永遠にいたるものを生み出すことができるのです。

リック・ウォレン師は、私たちが永遠をどう過ごすかは、二つの質問にどう答えるかにかかっていると言いました。その第一の質問はすでに触れました。第二の質問は「わたしがあなたに与えたものを、あなたはどう活用しましたか。」です。神が、私たちの人生に目的を持っておられるなら、神が私たちに与えてくださったものも、それぞれに目的があるはずです。神から与えられたものを「活用」するとは、単にあれこれと活動するということではなく、まずは、自分の人生の目的をしっかりと見据え、奉仕のため、伝道のためだけではなく、まごころから神を礼拝するために、神の家族のまじわりのために、そして、キリストの姿に変えられていくために用いることなのです。自分の目的を知ってこそ、自分に与えれたものを目的にかなって用いることができるのです。いよいよ、始まろうとしている四十日のデボーションを通して、神から与えられたものをどう用いたらいいのかを、教えられ、導かれていきましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、私たちに時間や健康、財産や能力、立場や環境など、良きものを多く与えてくださっていますのに、私たちは、それらを、あなたが願っておられるようにではなく、なんと自分勝手に使い、せっかくの賜物を浪費してきたことでしょうか。私たちが人生の目的を、永遠の目で見る時、あなたがくださったものは、永遠につながるものとなり、また、地上でもあなたのために役立つものとなるはずです。私たちはこれから人生の目的を探求しようとしています。まず、あなたの御子イエス・キリストとの正しい関係に導いてください。そして、そのことによって、私たちが、あなたに与えられたものを、あなたのために生かして用いることができるようにしてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

1/30/2005

ディスカションのために

1. 「この世の子ら」や「光の子ら」というのは、どんな人のことを指していますか。この両者の人生観で最も違っているのはどこでしょうか。
2. 「不正の富で友をつくる」とは何を意味していますか。私たちは誰を友とすべきでしょうか。
3. 「神のさまざまな恵みの良い管理者」（ペテロ第一 4:10）として、あなたは、どんなことを心がけていますか。

生きた供え物

ローマ 12:1-2

12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。
12:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

「目的の四十日」の期間中、５つの目的のそれぞれについて説教することになっています。今日から、５つの目的をひとつづつとりあげることにしました。今朝は、第１の目的の「礼拝」について、ローマ 12:1-2 より学びます。

一、応答としての礼拝

12:1 は、「そういうわけですから」という言葉で始まっていますが、「そういうわけ」とはどういうわけなのでしょう。私の母教会の牧師は、いつも、説教でそんなふうに言って、私たちに聖書を注意深く読むように教えてくれました。みなさんは、ローマ 12:1 の「そういうわけ」というのは、「どういうわけ」なのか、考えてみたことがありますか。この言葉は、いったい、何を指していると思いますか。

「そういうわけですから」というのは、ローマ人への手紙の１章から 11 章に書かれてるすべてのことを指しています。ローマ人への手紙は、パウロの他のいくつかの手紙と同じように、まずは、教理的な主題から始まっています。１章から３章は人間の罪について、４章から６章は信仰について、７章と８章は信仰者の苦悩と勝利、そして９章から 11 章ではユダヤ人に対する神の計画が論じられています。ローマ人への手紙は、11 章までは、手紙というよりは、まるで論文のようです。パウロは 12 章になってはじめて、クリスチャン生活の具体的なあれこれに触れ、ローマ人への手紙は、ようやく、手紙らしくなってきます。

クリスチャン生活に関する勧めを書くのに、なぜ、こんなに長い前置きがいるのだろうと、不思議に思うかもしれませんが、それは、クリスチャンの生活というのは、キリスト教の伝統や規則を守るものでも、たんに「人に親切にしましょう。」「ものごとに寛容でありましょう。」という徳目に励むというものでもないからです。私たちが、どう生きるべきかということは、私たち自身から出てくることではなく、神が私たちのために何をしてくださったかということから出てくることです。「教理」とは、神がどのようなお方で、私たちのために何をしてくださったかを解き明かすものですが、それがあってはじめて私たちは、私たちが何をすべきかを知ることができるのです。「私たちが何をすべきか」ということを「倫理」と言いますが、クリスチャンの倫理は、先ほど言いましたように、「神が何をしてくださったか」を教える「教理」に基づき、教理から生み出されたものでなければならないのです。

「十戒」は「倫理の中の倫理」と言ってもよいものですが、十戒もまた、神がどのようなお

方であり、私たちのために何をしてくださったかに基づいて、私たちのなすべきことを教えています。十戒は、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」という戒めからではなく、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」（出エジプト記 20:2）という宣言から始まっています。十戒のどの戒めも、主が、私たちの神であり、私たちが神の民であることを覚えるためのものであり、神が、神の民を、かってはエジプトの奴隷から、今は罪の奴隷から救い出してくださったことに応答するためのものなのです。

ローマ 12:1 の「そういうわけですから」というのは、このように、神がイエス・キリストによって私たちを罪から救い出してくださったことを指していますが、もう少し具体的に言うなら、それは、神のあわれみを指しています。神が、私たちを救ってくださったのは、私たちに救われるに価するだけのものがあったからでしょうか。決してそうではありませんね。私たちは、みな罪人であり、神の前には、無力なもの、汚れたもの、惨めなものであったばかりか、神に対して逆らうものであったのです。そのような私たちが救われたのは、ただ、神のあわれみによってでした。私たちは、自分の罪のゆえに苦しんでいたのですから、それこそ自業自得なのですが、神はそのような私たちの苦しみをも、まるでそれがご自分の苦しみでもあるかのように、思いやってくださったのです。神の「あわれみ」は、単なる同情やかわいそうに思うこと以上のものです。それは、もっと、深く、高く、大きく、決して変わることのない愛です。

この箇所のすぐ前の、ローマ９～11 章は、パウロがユダヤ人の救いについて論じているところですが、そこで彼は、神が異邦人をあわれんで救ってくださったのなら、ユダヤ人をもあわれんでくださらないはずがないと、ユダヤ人の救いの根拠を神のあわれみに置いています。ローマ 9:16 には「したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」とあり、ローマ 11:30-32 では「ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。」と書いています。ここで「あなたがた」というのは異邦人クリスチャンのこと、「彼ら」というのは、ユダヤ人のことです。ユダヤ人ばかりでなく、異邦人も、救いは、ただ神のあわれみにかかっていると、聖書は告げています。

礼拝は、この神の救い、神のあわれみへの応答なのです。それで、パウロは「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」（ローマ 12:1 新共同訳）と言って、神のあわれみに対して応答しなさいと勧めているのです。クリスチャンの生活は、自分の欲望に支配される我が儘勝手な生き方でも、人の目を気にしながら生きる臆病な生活でもありません。また、それは、規則でがんじがらめに縛られた窮屈な生活でも、義務感に追い立てられ疲れ果ててしまう生活でもありません。トマス・エリクソンという人が「新約の宗教は恵みであり、その倫理は感謝である。」と言っているように、罪から救われた者の生活は、神のあわれみに拠り頼み、神のあわれみに生かされ、神のあわれみに感謝して生きるものなのです。

礼拝とは、私たちが神に向かってささげるものですが、それは、私たちが「神を礼拝してあげる。」「神を賛美してあげる。」というものではありません。礼拝は、私たちから始まるのではなく、神が私たちのために成し遂げてくださった救いのみわざから始まるのです。神の救いがあり、神のあわれみがあって、はじめて、私たちは、それに対する応答として神を礼拝することができるのです。私たちは、神のあわれみなしには、神を礼拝することができないのですから、神のあわれみを謙虚に探求し、神のあわれみをもっと多く受けたいと思います。神と神のみわざを知れば知るほど、神のあわれみを受ければ受けるほど、私たちは、それにもっと感謝をもって応答できるからです。神のあわれみに大胆に応答していく礼拝をささげていきましょう。

二、献身としての礼拝

ローマ 12:1 は、次に、礼拝とは「からだ」をささげることであると言っています。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」という表現は、旧約時代に、祭司たちが神殿で犠牲をささげて礼拝していた様子を思い起こさせます。旧約時代、ささげ物のない礼拝はありえませんでした。人々は、必ず、動物のささげものを携えてきました。貧しくて動物が買えない場合は「家鳩のひな二羽」などが要求されました。穀物のささげ物もありましたが、穀物のささげ物にも動物のささげ物が伴いました。これは、私たちが、神に対して「物」ではなく「命」をささげなければならないということを教えています。神は、私たちの持っている何かではなく、私たち自身を、求めておられるのです。時間や健康、財産や才能などといった、私たちの持っている一部ではなく、私たちのすべて、私たち自身をささげることを神は求めておられるのです。「からだ」をささげるというと、手足を使ってする奉仕活動のことだと考えるかもしれませんが、聖書で使われている「からだ」という言葉には、そういう意味はなく、「全体」という意味があります。ですから、「あなたがたのからだを…ささげなさい。」というのは、私たちの身も心も、私たち自身を、私たちの人生のすべてをまるごと神にささげなさいという意味になります。

旧約時代には、礼拝では、動物がささげられ、神殿が建てられてからは、礼拝での音楽も盛んになりました。しかし、どんなに多くの犠牲がささげられ、華やかな音楽が奏でられても、人々が自分自身をささげていなければ、それらは、何の意味もなさないと、神は言われます。形式だけで、真実の伴わない礼拝について、神は、「たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささげ物をわたしにささげても、わたしはこれを喜ばない。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目もくれない。あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。」（アモス 5:22-23）と言っておられます。大変厳しいことばですが、私たちも、私たちがささげているものが、私たち自身や私たちのすべてではなく、私の一部、私の持ち物だけではないだろうかと、問い直したいと思います。リック・ウォレン師は "Worship" という言葉を、「礼拝の音楽」や「礼拝式」という意味ではなく、私たちが神を神としてあがめ、自分をささげる「行為」という意味で使っています。「礼拝式」はあっても「礼拝」がないということにならないようにしたいものです。私たちの礼拝を、本当の意味で神に受け入れられるもの、神を喜ばせ、また私たちも、それによって神を喜ぶものにし

ていきたいと思います。

「からだをささげる」ということばは、また、私たちにキリストの十字架を思い起こさせます。「キリスト」という名前には、もともと、神と人との仲立ちをする大祭司という意味があり、イエス・キリストこそ、大祭司にふさわしいお方でした。大祭司は神の代理人として人々の前に立つのですが、イエス・キリストは、代理人どころか、神の御子であって、神そのものでした。また、大祭司は人類の代表者として神の前に立つのですが、イエス・キリストは、神の御子でありながら、同時に、正真正銘の人間となってくださったお方ですから、私たちのために、また、私たちに代わって神の前に立つことができたのです。イエス・キリストは完全な大祭司でした。しかし、完全な大祭司がささげるべき完全なささげものは、この世にはどこにもありませんでした。どんな動物も、どんな人物も、世界中のどんな価値あるものも、人類の罪の代価としては足らず、また、神に受け入れられる聖なるものではありませんでした。そこで、イエス・キリストは、ご自身をささげものとして、神にささげられたのです。イエス・キリストは、「神の子羊」と呼ばれていますが、それは、キリストが大祭司でありながら、同時に、大祭司がささげる犠牲の子羊にもなられたということを意味しています。イエス・キリストは、私たちを罪から救い出すために、あの十字架の上で、ご自分を犠牲の子羊として、神にささげられたのです。私たちは、キリストがご自身をささげられたことによって救われました。

キリストが十字架の上でご自身をささげられた救いのわざは、キリストだけができる比類のないわざであり、誰も代わることのできないものです。しかし、聖書は、キリストの十字架の道は、ただキリストのためだけのものではなく、キリストに従う者も、キリストが歩まれたように十字架の道を歩むと教えています。キリストがそのからだを神にささげられたように、私たちもまた、そのからだを神にささげるよう求められているのです。そして、それこそが、私たちのなすべき礼拝であることを覚えましょう。

新改訳聖書で「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」とあるところは、新共同訳で「これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」と訳されています。もとの言葉は、「霊的な」とも「なすべき」とも訳せる言葉ですので、口語訳は、「それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。」と、両方の意味を重ねて訳しています。私は、ここでは新共同訳が良いと思っています。新共同訳で「なすべき」と訳されている「ロギコス」という言葉は、一般的には、「当然の」「理にかなった」「理性的」という意味で使われ、ここでは、キリストがそのからだをささげられたのなら、クリスチャンもまたそのからだをささげるのは、論理的で、当然のことであるという意味になります。ストア派の哲学者でエピクテタスという人は「ナイチンゲールはナイチンゲールのように歌い、スワンはスワンのように泳ぐ。そのように人間にとって、神をほめたたえるのは当然のこと（ロギコス）である。」と言っています。「からだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげ」るということを当然のこととして認めることができる私たちでありたく思います。

三、変革としての礼拝

２節に進みましょう。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこと

ろは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とあります。ここでは、礼拝は、私たちの内面を変えるものであると教えられています。

「この世と調子を合わせてはいけません。」というところで使われている「調子を合わせる」という言葉と、「心の一新によって自分を変えなさい。」というところで使われている「変える」という言葉は、それぞれ、別の言葉が使われていますが、どちらにも「形づくる」という意味があります。そして、「調子を合わせる」という方は「外側から形づくる」、「心の一新によって自分を変えなさい。」というところでは、「内側から形づくる」という意味の違いがあります。この世は、私たちを外側から形づくろうとし、神は、私たちを内側から形づくるのです。

私たちは、それぞれ、自分が生きてきた時代、生活してきた土地の影響を受けます。昨日、笹野兄弟のメモリアル・サービスがあって、彼もまたキャンプに入ったと言われていました。二世の方々はみな苦しい時代を通ってこられましたので、どの方にも、我慢強く、人に優しいという共通した性格が見られます。皆さんも、長くアメリカで生活していますと、自分でも気づかないうちに、アメリカンナイズされしまって、日本に行った時、家族や友だちが、その変化に驚くということあるかもしれません。聖書が「この世と調子を合わせてはいけません。」というのは、その時代の文化や風習を一切拒否しなさいという意味ではありあません。ここでいう「この世」というのは、神に敵対する世界のことを意味しています。神を否定し人間をあがめ、神なしでも幸福な世界を作ることができるとする物の考え方、原理、生き方、価値観、人生観、世界観などといったものをさしています。スーパーマーケットで買い物をする時、ついついテレビのコマーシャルに出ていた商品に、手が出てしまうように、私たちは、知らず知らずのうちに、この世によって形づくられてしまい、神から離れた物の考え方と生活に引っ張りこまれてしまうことがあります。ですから、私たちは、日曜日、安息日に今までの生活をいったん中断し、神と神のことばに向かうのです。そして、この世の考え方によって形づくられてきたものを矯正していただき、神が私たちに望んでおられる姿へと造り変えていただくのです。車に定期点検が必要なように、私たちも、一週間ごとの点検が必要です。ある時、ヨーロッパから来たア・カペラのコーラス・グループが歌うのをテレビで見たことがありますが、その時、彼らは、曲と曲の合間に、音叉を使って音を合わせていました。優れた音感を持った専門家であっても、やはり、時々、音叉が出す正確な音に合わせる必要があるのですね。私たちの信仰にも、そのようなチューニングが必要です。そのチューニングの場が礼拝なのです。

「むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とありますが、私たちの心をほんとうの意味で新しくしてくださるのは、聖霊です。しかし、聖霊の働きを願い求めるのは、私たちの悔い改めであり、信仰です。「人生の第３の目的」のところで学びますが、私たちには、キリストのようになるという人生の目的が与えられています。聖霊によって、絶えず、私たちが内側から変えられていないと、私たちはキリストの姿を持つことができず、この世に形づくられ、この世の姿に戻ってしまいます。礼拝が、神への真実な応答であり、献身の時であり、私たちが神によって造りかえられる場であるようにと、心から願います。一回、一回の礼拝がそのような礼拝になるように、私たち、ひとりびとりが、この礼拝にただ来てこ

こで一時間を過ごすだけというのでなく、本当に主を礼拝する者となることができるよう、祈ろうではありませんか。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、私たちが何をするにもまさって、霊とまことをもってあなたを礼拝することを願っておられます。また、あなたは、私たちの生活のすべてが、礼拝となることを願っておられます。私たちも、心からの礼拝をささげることが出来た時、どんなにか満ち足りた思いになることでしょうか。どうぞ、私たちの礼拝が、あなたに喜ばれ、また、私たちがそれを喜ぶものとなりますよう、導いてください。そのために、私たちひとりびとりが知らなければならないことを学び、実行しなければならないことを実行できるように助けてください。みずからを、聖なる供え物としてあなたにささげ、どのように神を礼拝すべきかを私たちに教えてくださった、主イエス・キリストのお名前で祈ります。

2/6/2005

ディスカションのために

1. 「礼拝」という言葉から、あなたが連想する第一のものは何でしたか。「５つの目的」を学んだ後、「礼拝」に対する概念がどのように変わりましたか。
2. あなたは、毎週の礼拝に何を期待していますか。神は、礼拝において、あなたに何を期待しておられるでしょうか。
3. 礼拝の本質と礼拝のプログラムとはどのように関連しているべきでしょうか。

信じること、属すること

ローマ 12:9-16

12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。
12:10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。
12:11 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。
12:12 望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。
12:13 聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい。
12:14 あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。
12:15 喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。
12:16 互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思ってはいけません。

今朝は、「５つの目的」の第二、「私は、神の家族の一員として造られた。」ということについて学びます。私は、このことを考えるたびに、"To believe is to belong." ということばを思い起こします。"To believe is to belong." とは「信じることは、属すること」という意味で、これは、古代からずっと教会の中で大切にされてきたことばです。イエス・キリストを信じる者が、キリストの教会に属するということは、当然と言えば当然なのですが、このことは、必ずしも、はっきりと理解されてきたとは思えませんので、私たちはどのようにして教会に属するのか、なぜ教会に属していなければならないのか、また、教会に属するものとしてどうあるべきなのかを、もう一度、聖書から確かめておきたいと思います。

一、キリストに属する

聖書は、まず、キリストを信じる者は、キリストに属していると教えています。子どもたちが学校からもらってくるものに "This belongs to : " と書いてあることがありますね。その後に子どもの名前を書き込んでやると、「これはナンシーのもの」「これはロイのもの」などとなります。そのように、私たちも、キリストを信じた時、"This belongs to Christ" と書き記され、キリストに属する者、キリストの所有物となったのです。

ローマ 6:5 に「もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」ということばがあります。キリストを信じる者は、キリストとつなぎ合わされ一体になったというのです。運動会で「二人三脚」という種目があります。ふたりの人が横に並び、肩を組んで、ふたりの右足、左足を紐で結びます。ふたりは、一体になりますから、調子をあわせて同じ方向に向かわないと、たちまち転んでしまいます。ひとりの人は右に、ひとりの人は左に向かうというわけにはいかなくなります。そのように、キリストを信じる者も、キリストとつながれて、キリストと共に歩むようになるのです。けれども、キリストとキリストを信じる者とのつながりを説明するのに、「二人三脚」のたとえでは十分ではないように思います。キリストに結び合わされるというのは、キリストとともに歩む以上のもの、キリストとともに生きることだからです。これは、と

てもお気の毒なことなので、あまりたとえに使いたくはないのですが、キリストとクリスチャンとのつながりは、体がくっついて生まれて来る「シャム双生児」にたとえられるかもしれません。臓器を共有している双子の場合、ふたりを切り離すと、どちらかが死んでしまいます。クリスチャンとキリストとの結合は、そのような結合です。私たちはキリストから離れては生きてはいけないのです。私たちは、キリストと一体となり、キリストと共に十字架に死に、キリストと共に復活して、キリストの復活の命、永遠の命にあずかっているからです。

「キリストと共に十字架に死に、キリストと共に復活する。」このことは、にわかには理解しがたいことです。ローマ 4:25 に「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた。」とあるように、キリストの十字架は私たちのため、キリストの復活は私たちの救いのためでした。しかし、同時に、聖書は、キリストの十字架は、そこに私たちも共に死んだ、私たちの十字架であり、キリストの復活は、私たちも主と共によみがえった、私たちの復活であると教えています。あの十字架と復活は、「私たちのため」ばかりでなく、「私の」十字架であり、復活です。神は、キリストが私たちのために死なれ、よみがえられたことを信じる者に、私たちがキリストにあって死に、よみがえっていること、また、キリストのために死に、よみがえることを理解し、体験するように願っておられます。この理解、体験は、私たちのクリスチャンの生涯をかけてのものです。パウロは、ピリピ 3:10-12 で「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。」と言っています。しかし、どこかで、このことの理解と体験を求め始めなければ、いつまでたっても、それは私たちのものとはなりません。今年のレントが、それを追い求めはじめる良い出発点になるよう、こころから願います。

私たちは、信じる時、なによりもまず、キリストに属するものとなります。キリストに属するものとなるのでなければ、私たちの名前が、たとえ教会の会員名簿にあったとしても、それが、私たちに天国を、永遠の命を保証するものとはなりません。天国の「いのちの書」には、キリストに属する者だけが、キリストといのちのつながりのある人だけが、その名を記されているのです。あなたは、キリストに属する者となっているでしょうか。その確信をはっきりと持っているでしょうか。

二、キリストのからだに属する

次に、私たちは信じる時、キリストのからだに属するようになります。ローマ 12:4-5 には、「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」とあります。キリストに属するということは、キリストのからだの一部になるということです。そして、キリストのからだの一部になるということは、教会の一員になるということです。なぜなら、教会は「キリストのからだ」だからです。

昨日のリック・ウォレン師のメッセージの中にもありましたが、「キリストを信じてもよい

が、教会には属したくない。」と言う人がいます。これは、正しいことではありません。キリストを信じることは、キリストに属することであり、キリストに属することは、キリストのからだである教会に属することだからです。教会によっては、洗礼を受けることと、教会のメンバーになることとを分けているところがありますが、私たちの教会では、洗礼と同時に教会のメンバーになります。洗礼は、キリストに属することだけでなく、教会に属することを表わすものだからです。私は、今まで、多くの方々に洗礼を授けてきましたが、たとえ、それが臨終の時の洗礼であったとしても、教会の執事会の承認を得て、その方を教会のメンバーとして受け入れるという形で行なってきました。私が洗礼を授けた人は、私が属する教会のメンバーとなるべきだと信じてきたからです。洗礼の水は、「産湯」のようなものであると言われます。洗礼は、洗礼を受けた人が神の子どもとして生まれたことを表わすものですが、その人は、霊的、信仰的には、まだ生まれたばかりの赤ちゃんなのです。生まれたばかりの赤ちゃんを、家族に迎え入れず、放り出してしまう家庭がどこにあるでしょうか。教会のメンバーに加えられることのない洗礼は、特別な例を除いて、生まれた子どもを放り出すようなもので、私には、無責任なものに思えるのです。教会は、「母なる教会」と呼ばれてきました。教会は、救われた者を養い、育てる、母親の役割を与えられています。教会が洗礼を授けた人に「メンバーになる、ならないはあなたの自由ですよ。」というのは、母親としての役割を放棄していることになると思います。また、教会に属そうとしない人がいるなら、その人は、教会の母親としての役割を無視していることになります。「教会を母としない者は、父なる神を侮蔑する。」ということばがあるほど、教会に属することは大切なことです。

また、「教会の外に救いはない。」ということばもあります。使徒たちや使徒たちの直弟子たちが世を去った時、間違った教えがどんどんと広がって、人々は正しい教えを持つ教会から離れていきました。「教会の外に救いはない。」とは、そんな時代に言われたことばですが、これは今も真理です。異端がはびこった時代、教会は、間違った教えから人々を守る砦でしたが、それは今も同じです。私たちは、教会ではじめて真理を、救いにいたる真理を聞きます。教会から離れては、どんなに聖書を研究したとしても、それは、頭だけの知識で終わってしまい、救いにいたることはできません。教会に属し、教会に留まっていないと、たちまち、間違った教えに引っ張られ、救いを失ってしまいます。

キリストを信じる者は神から生まれた者です。そして、神は、キリストを信じる者たちを神の家族の一員として生んでくださいました。私たちは、イエス・キリストへの信仰を告白することによって、その告白を二千年の間守りつづけてきた教会に加わるのです。キリストを信じる者はキリストに属し、キリストに属する者は、教会に属します。そして、教会に属することによって、キリストへの信仰を正しく守り、それを成長させることができるのです。

三、まじわりに属する

使徒信条は、「我は…聖なる公同の教会、聖徒の交わり…を信ず」と告白していますが、これは、教会とは、具体的には「聖徒の交わり」であるということを言っています。教会は、本質的には、建物でも、組織でもありません。それは「まじわり」です。しかし、「まじわり」と言っても、たんなる「ソーシャル」のことではありません。アメリカにある日系の教会には、日系コミュニティに奉仕するという側面があって、日系団体のひとつであるかのように考えら

れがちですが、教会は、数多くある日系コミュニティのひとつではありません。教会は、「聖徒」、つまりキリストを信じ、この世から選び分かたれた者たちのまじわりです。ですから、教会のまじわりは、同じ日本人だから、同じ故郷の人だから、同じ学校の同窓生だから、同じ職種の人だからというので、保たれていくものではありません。たとえ言葉や文化、世代や境遇が違っても、キリストを信じる信仰によって結びあわされていくところ、それが教会です。教会は、好きな人同士が仲良くするところではありませんから、人間的なコネクションを越えて、互いを「キリストにあって」見るところです。昨日のリック・ウォレン師のメッセージの中で、「あなたは、あなたの隣に座っている人に属しているのです。」という部分がありました。私の隣に座っていた桜井先生が、私をつついて、"I belong to you." と言いましたが、しかし、私たちは、直接、互いに属しているのではありません。キリストを介して属しているのです。クリスチャンひとりびとりはキリストに属し、キリストに属することによって、キリストのからだに属し、キリストのからだに属することによって、他のクリスチャンに属するのです。キリストを飛び越えて、直接他の人とのつながりを持ち、それを保とうとしても、それは人間的なもので終わってしまいます。「キリストにあって」のまじわり、これが分からなければ、教会は「聖徒のまじわり」とはなりません。そこに「おつきあい」はあっても「まじわり」は生まれてきません。

今朝の聖書の箇所、ローマ 12:9-16 は、教会のまじわりがどんなものかを描いています。ここには、まず、「偽りのない愛」(9 節）という言葉が出てきます。「愛」という言葉は、しばしば、安易に使われ、甘いだけのものや、自分によくしてもらいたいことだけを要求するわがままなものであると誤解されていますが、愛とは、本来は、もっと厳しいものです。「悪を憎み、善に親しみなさい。」とありますように、ほんとうの愛は、悪を憎む厳しさを持っています。人間関係は大切なものです。関係が壊れたら、それを修復しなければなりません。それは教会でも同じです。しかし、教会は、人間関係がすべてのところではありません。教会には、神との関係という、もっと大切なものがあります。人間関係が第一になって、トラブルを避けさえすれば、ものごとが丸く収まりさえすればそれでよいというのではありません。関係の修復とともに、問題の解決に真剣に取り組んでいく、それが、聖徒のまじわりです。

10 節に「兄弟愛をもって」ということばが続いています。教会では、クリスチャンはお互いを「兄弟」「姉妹」と呼びますが、それが、教会の「しきたり」だからそう呼ぶというのでなく、心からそう呼び交わすものでありたいと思います。しかし、心から互いを「兄弟」「姉妹」と呼ぶのは、人間の思いでできるものではありません。私たちは、人間的な好き嫌いの感情で左右されてしまいやすいものですから、神への信仰と祈りなしにはできるものではありません。しかし、ひとたび、神からの愛が与えられる時、私たちは、人を見かけで見るのでなく、その人を「キリストにあって」見ることができるようになります。どの人をも「キリストが代わりに死んでくださったほどの人」（ローマ 14:15）として見ることができるようになります。あなたの隣に座っているクリスチャンは、あなたにとって「兄弟」でしょうか。「姉妹」でしょうか。「キリストが代わりに死んでくださったほどの人」でしょうか。

次に、10 節と、16 節を見ましょう。10 節に「互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」16 節に「互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思ってはいけません。」とあります。まじわりにおいて「謙遜」

ほど大切なものはありません。「謙遜」はまじわりの基礎です。謙遜が失われる時、教会のまじわりは壊されてしまいます。

完全なまじわりを保っている、完全な教会は、地上のどこにもありません。どの教会も、いろいろな試練や苦しみを通りながら、そのまじわりを、よりきよめられたもの、より暖かいものにしていこうと努力しています。教会のまじわりを批判することは簡単です。しかし、神の家族の一員とされた私たちは、教会のまじわりを批判するためにではなく、それを育てるために召されたのです。リック・ウォレン師が「キリストへのコミットメントは教会へのコミットメントによって表わされなければならない。」と言うように、私たちも、神への愛を、教会への愛によって表わしたいと思います。

「日本にはわずか１パーセントのクリスチャンしかいない。」と、良く言われます。紛争の最中にあるイラクでさえ、３パーセントのクリスチャンがいるのですから、それは、悲しいことです。しかし、日本では、その１パーセントのクリスチャンが、とても素晴らしい働きをしているということも見逃してはならないと思います。日本のクリスチャンはとても、真面目で、忠実です。私は日本で伝道してきて、そのことを体験してきました。ある教会にクリーニングの仕事をしている兄弟姉妹がいましたが、この兄弟姉妹は何をするにも、教会を中心にして考える人たちでした。新しくお店を開く時も、仕事が終わってから祈祷会に行けるように、またお客さんに教会の案内ができるようにと、教会の近くにお店を開きました。私が奉仕していた教会では、ある時期、青年会のメンバーが、ひとりの姉妹だけになったことがありました。彼女には他の地域の人との結婚の話もあったのですが、彼女は、教会に留まって教会のために働きたいと願って、神が教会内で結婚相手を与えてくださるのを待ちました。神は、彼女の祈りに答えて、彼女に素晴らしい男性を与えてくださいました。その後、次々と青年たちが加えられ、彼らは結婚して教会に留まり、教会は目に見えて成長していきました。東京の練馬で奉仕していた時には、ひとりの兄弟が千葉から二時間もかけて教会に通い、毎週礼拝後も残って、会計の仕事をして帰っていました。学校を選ぶ時も、就職する時も、また結婚においても、教会を第一に考えてくださった方々によって、教会は支えられてきました。アメリカでも、神は日本人の忠実さを用いて、ここにこのように教会のまじわりをつくりあげてくださいました。このまじわりに加えられた私たちは、今、その恩恵を受けている、このまじわりに甘えるだけでなく、このまじわりを「聖徒のまじわり」として育てていくために、自分をささげたいと思います。積極的に、しかし謙遜に、そのために、自分の役割を果たしたいと願います。

（祈り）

父なる神さま、あなたを知らない時には、人との関係が、私たちにとって、人生のすべてでした。人の目を気にしながら、それでいて、自分のしていることが人の目に触れ、認められることを求めて生きてきました。キリストを知ってからは、他の人との関係を、あなたとの関係でとらえるようにと教えられてきました。しかし、以前の生き方からは完全に抜け出せず苦闘することが多くあります。しかし、あなたは、その苦闘の中で、私たちに、まず、あなたとの関係を確立し、それを深めるようにと、教えてくださいました。あなたとの関係を深めることによって、私たちに、偽りのない愛と真の兄弟愛、そして、謙遜を与えてください。そして、教会のまじわりに何かを求めるだけでなく、それを育てるために用いられるものとしてくださ

い。教会のかしら、主イエス・キリストのお名前で祈ります。

2/13/2005

ディスカションのために

1. **あなたは「クリスチャン」をどう定義しますか。**
2. **一般で言う「おつきあい」と、キリストにある「まじわり」とはどう違いますか。**
3. **主にある「まじわり」に加わり、それを深め、育てるために、あなたに出来ることは何でしょうか。**

神の子の栄光

ローマ 8:18-25

8:18 今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。
8:19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。
8:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。
8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。
8:22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。
8:23 そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。
8:24 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。
8:25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

今、礼拝では、「人生の５つの目的」を毎週ひとつづつ学んでいます。第一の目的は「私たちは神に喜ばれ、神を喜ぶために造られた。」、第二の目的は「私たちは神の家族の一員として造られた。」でした。今朝学ぶ、第三の目的は、「私たちはキリストのようになるために造られた。」です。

「私たちはキリストのようになるために造られた。」と言いますが、「キリストのようになる」というのは、いったいどういうことなのでしょうか。ある人たちは、キリストが父なる神に対して、十字架の死にいたるまで従順であったように、神と、神が立てられた権威に徹底して従うことであると考えました。また、ある人は、キリストのように、この世の財産を持たないで、神にだけ頼りながら生きることが、「キリストのようになる」ことだと考えました。さらに、生涯独身を貫き通すのが、「キリストのようになる」ことだと考える人もありました。実際、修道士たちは、今あげた「従順」と「清貧」（しひん）と「貞潔」の三つをすべて守ることによって、キリストのようになろうとしました。聖フランチェスコは、あまりにもキリストに近く生き、キリストに似たものとなったので、その手のひらにキリストが十字架で受けたのと同じ釘跡が現れてきたと言われています。そのようにキリストに似たものとなろうとする情熱は素晴らしいものですが、では、キリストのようになるためには、みんなが修道士、修道女にならなければならないのでしょうか。もし、そうだとしたら、ほんの一握りの人しか「私たちはキリストのようになるために造られた。」という人生の目的を満たすことができないということになります。たとえ、修道士、修道女でなくても、私たちはキリストのようになることができるはずです。また、「従順」、「清貧」、「貞潔」は、たとえ、修道士、修道女でなくても、守らなければならないことだと思います。人間が第一になっている現代で神に服従すること、物質主義の世の中でそれにおぼれずに生きていくこと、そして乱れた社会の中でも結婚の誓いを守ることは、どれも大切なことです。

「キリストのようになる」とは、「キリストのように生きる」ことで、それは、生活の中に現れてくるものなのですが、そうした生活の変化は、どこから来るのでしょうか。それは、「いのち」の変化から来るのです。「いのち」も「生活」も、そして「人生」も英語では同じことば "life" ですが、それぞれ違った意味があります。「人生」は日々の「生活」の積み重ねであり、日々の生活は、私たちに与えられた「いのち」の現れです。「人生」は「生活」から、「生活」は「いのち」から始まります。神の目的にかなった人生は、クリスチャンとしての新しい生活からはじまり、クリスチャンの日々の生活は、神から与えられた新しいいのちから始まります。主イエスが「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」（ヨハネ 3:5-6）と言われたように、キリストを信じて、新しいいのちを受けるまでは、キリストのように生きる新しい生活は始まらず、「キリストのようになる」という目的を持った人生をおくることはできないのです。「５つの目的」に向かっていく、あなたの人生のスタートラインは大丈夫でしょうか。

一、神の子どもの立場

私たちは、聖霊によって新しいいのちを与えられ、「キリストのようになる」ための基盤を与えられています。それは、三つあって、第一は神の子どもとしての立場、第二は神の子どもとしての身分、そして、第三は神の子どもとしての性質です。

最初に、神の子どもとしての立場について見てみましょう。今、ローマ人への手紙の第８章を開いていますが、その第１、２節に「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」とあります。神の子どもとなった者は、罪から解放されているというのです。最近は、罪を軽く見て、「罪からの解放」と言われても、有り難くもなんともないという傾向がありますが、聖書は、決して罪を軽くは見ていません。私たちは、何かの犯罪を犯した人を見て、「なんてひどい人なんだろう。」と思うことがありますが、私たちは、実際に犯罪を犯しはしなくても、時と場合によっては同じ事をやりかねないものを心に持っているのです。実際の犯罪も、心の奥底に巣くっている罪をも、神は裁かれます。私たちは、完全に正しく、完全に聖い神の目の前に等しく罪人であり、「有罪判決」を宣告され、刑の執行を待っている死刑囚のようなものです。「罪を犯した者は…死ぬ。」（エゼキエル 18:4）「罪から来る報酬は死です。」（ローマ 6:23）とあるように、私たちは、罪の結果、肉体の死ばかりでなく、霊的な死をも体験しなければならないのです。ところが、聖書は、「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」と宣言しています。どうしてでしょうか。イエス・キリストが、私たちの罪の身代わりとなって、あの十字架の上で死んでくださったからです。いのちの主が死んでくださり、聖いお方が罪を背負ってくださった、そのことによって、私たちの罪は赦されました。有罪判決を受けていた者が無罪放免となったのです。いいえ、無罪放免となったばかりでなく、神の「義」をいただき、神の目に正しい者とされ、神の子どもとして受け入れられたのです。罪が赦されることなしに、神に近づくことはできません。神の前に正しい者とされていなくて、どうして神の子どもでいられるでしょうか。神の子どもは罪を赦されているのです。

「罪からの解放」、それは、私たちの罪が赦され、神のさばきから免れているというだけに留まりません。キリストを信じる者は、罪の原理から解放されています。ここで「原理」というのは「法則」と言い替えたほうが分かりやすいでしょう。たとえば、地上にあるものすべてには「引力の法則」が作用しています。体重が増えるとからだが重くなるのは、重力がかかっているからです。スペース・シャトルに乗って無重力の世界に行けば、どんなに体重があっても、楽々と飛んだり、跳ねたりできます。人間や動物だけでなく、植物も重力を感じるそうです。スペース・シャトルで植物を栽培したところ、植物の根が重力がないため、とても混乱して、あちらこちら、むちゃくちゃに伸びてしまったというレポートがありました。そのレポートを書いた宇宙飛行士は、根の部分を暗くし、葉にもっと光を当てることによってそれに対処したそうです。また、無重力では、風が起こらないため、植物が十分に呼吸できないで枯れてしまい、ファンをまわして風を起こしてやらなければならなかったとも、そのレポートに書いてありました。私たちは、ふだん重力や引力の法則などを意識してはいませんが、それがあって始めて、私たちは生きていられるのですね。同じように、私たちは、霊的な法則のもとにあり、かつて私たちは、罪の法則に支配されていました。重力によって、物体が高いところから低いところに落ちていくように、真実から偽りへ、きよさから汚れへ、思いやりから自己中心へと落ちて行ったのです。誰も、重力から逃れられないように、罪の力から逃れることができる者はありません。しかし、イエス・キリストは、復活によって罪と死に打ち勝って、私たちを、罪の力から解放してくださったのです。

これは、なんと大きな恵みでしょうか。私たちは、「驚くばかりの恵みなりき。この身の汚れを知れる我に。」と、「アメイジング・グレイス」を賛美しますが、私たちの罪を赦し、私たちをそこから解放してくださった神の大きな恵みに、ほんとうに驚き、感謝し、賛美しましょう。また、罪に負けそうになる時や罪に捕まりそうになる時、神の子どもとしての立場を思い起こしましょう。自分はすでに罪を赦されているのだ、罪の法則から解放されていて、それに従う必要はないのだということを覚え、罪の誘惑に打ち勝っていきましょう。

二、神の子どもの身分

次に、神の子どもとしての身分について見ましょう。ローマ 8:14 からこう書かれています。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって『アバ、父。』と呼びます。」（ローマ 8:14-15）ここで、「アバ」と言われているのは、ヘブル語で「お父さん」という意味です。しかも、小さい子どもが、「ダディ、おとうちゃん」と言うような響きを持っています。小さい子どもが「ダディ、おとうちゃん」と呼んで、父親のところに飛び込んで行くように、キリストを信じて神の子として生まれた者は、神を「父」と呼んで、なんの遠慮もなく、神に近づくことができるのです。世界にはおよそ 200 の国がありますが、王制をとっている国は、29 ヶ国あるそうです。中には民衆の中に入って来る王様もあるかと思いますが、王室がいくら開放的であったとしても、一般の民衆はそう簡単には、王様に近づくことはできないでしょう。しかし、王子であれば、王女であれば、「お父さん」と言って、いつでも、王様に近づくことができます。王子、王女という身分があればこそですね。キリストを信じる者には、神の子としての身分が与えられています。つまり、王の

王、主の主である方の王子、王女となのです。なんという大きな特権でしょうか。私たちは、キリストの十字架によって罪を赦され、キリストの復活によって、罪から解放されました。そして、神の子どもの身分を与えられて、神を「父」と呼んで、神に近づくことができるようになったのです。私たちは、まず、私たちに、こんなに大きな特権が与えられているということを知り、確信しましょう。そして、その特権を生かして、神に近づき、キリストのようになっていこうではありませんか。

三、神の子どもの性質

第三に、私たちに与えられた神の子どもとしての性質について考えましょう。ある人は、クリスチャンでない人も、クリスチャンも本質的には何も変わらないと言います。みんな等しく罪人で、クリスチャンでない人が、罪の赦しを知らないのに対してクリスチャンは罪を赦されていることを知っているだけに過ぎないと言います。私たちが神の子どもとなったのは、神の子どもと呼ばれるだけ、タイトルが変わっただけで、中身はなんの変化もないと言うのですが、果たしてそうでしょうか。聖書は、私たちは救われた時、「古い人を脱ぎ捨て…、心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着」（エペソ 4:24）たと、言っています。「神にかたどり造り出された」というのは、愛やきよさ、正義やあわれみなどといった神が持っておられるご性質を受けたということです。救われた者は、根本的に、その性質が変化したのです。聖書は、はっきりと、「世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となる」（ペテロ第二 1:4）と教えています。実際、キリストの弟子たちは、聖霊の力により、その性質を変えられています。人々の非難を恐れてキリストを否定したペテロは、勇敢にキリストを証しする者になり、雷の子と言われたヨハネは柔和な愛の使徒となり、教会を迫害したパウロは、キリストと教会を心から愛する者となりました。人間の子どもでも、動物の子どもでも、子どもは親の性質を受け継いで生まれてきます。神が生んでくださった者は神の性質が分け与えられているのです。

私たちに神の子どもの性質が与えられているなら、私たちは神の子どもらしくなるはずです。神は、神の子どもたちが、神の子どもらしくなることを願っておられます。もし、私たちが、神のかたちに造られていることも知らないでいるとしたら、それは、神のみこころを悲しませることになります。神の子どもとしての性質を成長させ、キリストのようになろうとしないなら、それは、神の目的を損なうことになります。私たちは、キリストのようになりたいと願っていますが、しかし、どのようにして、神から与えられた性質を成長させ、キリストのようになることができるのでしょうか。実は、聖書の多くの箇所がそのことに焦点をあわせ、私たちが聖書を学ぶのは、そのためなのですが、ここでは、三つのことに心を留めておきましょう。

まず、第一に、神の子どもとしての立場と身分をしっかりと確認することです。たとえ、自分はすこしも神の子どもらしくないと感じることがあったとしても、それで、神の子どもでなくなるわけではありません。罪の悔い改め、キリストへの信仰をもう一度点検して、自分に与えられている神の子どもとしての立場や身分を確認しましょう。神は、私たちが神の子どもらしくなってからはじめて私たちを神の子どもとして受け入れてくださるというのではありません。少しも神の子どもらしくない時から、その大きな愛で、私たちを神の子どもにしてくださったのです。神の愛こそ、神の子どもとして成長する養分です。神の子どもらしくしていない

と、神の怒りを買うかもしれないという恐怖や圧迫が、私たちを神の子どもらしくするのではありません。植物が太陽に向かって伸びていくように、私たちも、神の愛と恵みを見つめてこそ、神の子どもとして成長することができるのです。

第二に、神の子どもとしての性質は苦難の中で成長する、ということを忘れないようにしましょう。ローマ 8:18 で、パウロは「今の時のいろいろの苦しみ」と言う言葉を使っています。この世、そして、今の時代は、神に敵対していますから、そこは、神の子どもにとって決して居心地の良い場所ではありません。神の子どもとして成長すれば成長するほど、ますます居心地の悪いものになるかもしれません。しかし、だからこそ、神の子どもとしての性質を発揮しなければならないのです。困難がなければ、忍耐は養われません。リック・ウォレン師が、キックオフ・ミーティングで話していたように「DMV の長い列に並んではじめて」忍耐が問われ、それが養われるのです。

第三に、私たちは、自分たちの将来の姿を思い描くことによって、そこに到達することができます。「今の時のいろいろの苦しみ」と言ったパウロは、その後すぐに、「将来私たちに啓示されようとしている栄光」という言葉を使っています。「今の苦しみ」と「将来の栄光」を比較して、「今の苦しみ」は取るに足らないと、断言しています。私たちは、多くの場合、目の前の苦しみが、あたかも自分を飲み尽くすほど、大きなものに感じてしまいやすいものなのに、それを「取るに足らない」と言わせる「将来の栄光」とは何なのでしょうか。それは、「子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われること」（ローマ 8:23）であると言われています。ここで「子にしていただく」と言っているのは、どういう意味でしょうか。今、私たちが神の子どもではなく、その時にはじめて神の子どもになるという意味ではありません。それは、神の子どもとして、完全に成長しきるということを意味しています。神の子どもとは言っても、神の目から見るなら、私たちは、今は、まだ小さな子どもにすぎません。しかし、世の終わりにキリストが再びこの世に来られる時には、私たちは完全に成長したこどもとなるのです。今私たちは、内面の性質が変えられるのを経験していますが、その時には、私たちの内面が完全に変化を遂げるだけでなく、私たちの身体までもが栄光の身体に変えられるのを体験するのです。

ヨハネ第一 3:2 に「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」とあります。その時、私たちは、完全に成長し、最も高いレベルで「キリストに似た者」となるのです。このことを、信じ、望み見るなら、それによって、私たちは、キリストのようになることができるのです。あこがれの人物を持っている子どもたちは幸せだと思います。歴史上の人物であれ、身近な人であれ、「あの人ようになりたい」と思っているうちに、ほんとうに、その人のようになっていきます。私たちも、キリストのようになるために、何よりも、キリストを思い、キリストから目を離さないようにしましょう。私たちに与えられている、神の子どもとしての立場、身分、性質をしっかりと確認しましょう。それを見失ったら、「キリストに似た者」となることはできません。そして、将来の栄光をしっかりと信じて、今の苦しみの時をも乗り越えたいと思います。その時、私たちは、キリストの姿へと変えられていくのを体験することできるのです。

（祈り）

父なる神さま、聖書が言うように、世の終わりが望み、あなたの国が完成する時、私たちがどうなるのか、私たちには完全には知らされていません。しかし、確かなことは、その時、私たちが「キリストに似た者」となることです。私たちを、この希望によって支えてください。このゴールに向かわせてください。私たちの人生を「キリストに似た者になる」ことを追求するために使うことができるよう、導いてください。私たちの主イエス・キリストのお名前で祈ります。

2/20/2005

ディスカションのために

1. キリストを信じた時、あなたの「立場」「身分」「性質」はどのように変化しましたか。
2. 神の子どもとされることと、神の子どもらしくなることとにはどのような関係がありますか。神の子どもらしくなってはじめて、神の子どもとされるのでしょうか。それとも、神の子どもとされてはじめて、神の子どもらしくなることができるのでしょうか。
3. 神はどんな手段を用いて、私たちを、より神の子どもらしくしてくださるでしょうか。神が用いてくださった手段について体験をわかちあいましょう。

信仰と奉仕

ローマ 12:3-8

12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。
12:4 一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、
12:5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。
12:6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。
12:7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。
12:8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。

私たちが今取り組んでいる「５つの目的」は、五つのキーワードで表わすことができます。それは、「礼拝」、「まじわり」、「弟子訓練」、「奉仕」、そして「伝道」です。この五つがこの順序で並んでいることには意味があります。この順序は、まず、「優先順位」を表わしています。「礼拝」、「まじわり」「弟子訓練」という順序は、神を第一とし、教会を第二にし、自分を第三にすることを、「奉仕」、「伝道」という順序は、まず教会に仕えること、次に社会に仕えることを教えています。また、この順序は、依存関係も表わしています。つまり、神への「礼拝」があってはじめて、教会の「まじわり」が生まれ、教会の「まじわり」の中でこそ「弟子訓練」つまり「信仰の訓練」がなされる、そして「信仰の訓練」に基づいて「奉仕」が、「奉仕」に基づいて「伝道」がなされるのです。「礼拝」の上に「まじわり」、「まじわり」の上に「信仰の訓練」、「信仰の訓練」の上に「奉仕」、「奉仕」の上に「伝道」が来るのです。「伝道しましょう。」「奉仕しましょう。」と掛け声をかけても、それがうまくいかないのは、たいていの場合、それ以前の「礼拝」や「まじわり」、「信仰の訓練」がきちんと理解されていない、また、体験されていないからではないかと思います。今回、「礼拝」から始まって「伝道」にいたるまで、順序を踏んで学んでいるのは、とても幸いなことです。これによって、私たちも、信仰生活において、踏むべき順序をしっかりと踏みしめていきたいと思います。

今朝は、第４の目的「私は神に仕えるために造られた。」ということ、つまり、奉仕について学びます。奉仕は、先ほど言いましたように、「礼拝」、「まじわり」、「弟子訓練」もしくは「信仰の訓練」に基づいたものですので、今朝は、奉仕がどのように「礼拝」や「まじわり」、また「信仰の訓練」とかかわっているかを学び、奉仕とは何なのかをしっかりと理解しておきたいと思います。

一、奉仕と礼拝

まず、奉仕と礼拝について考えてみましょう。ローマ人への手紙は、クリスチャン生活は、

神への礼拝から始まると教えています。ローマ 12:1-2 に「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とあります。これは、信仰生活とは、神を第一とする生活だということを教えています。『人生を導く５つの目的』の最初にある「人生はあなたが中心ではありません。」というのは、ある人にはショッキングなことばだったと思います。英語では "It's not about you." となっていて、もっと強烈な言い回しになっています。私たちは、クリスチャンになって、神が私の造り主であり、キリストが人生の主であるということを知ったのですが、いつの間にかそれを忘れて、自分の人生は自分のためにあるという考え方に戻ってしまうことがあります。私のためにキリストが死んでくださったことは信じているのですが、私はキリストのために生きるのだという献身に、まだ導かれていないのです。神が私のために存在するのではなく、私が神のために存在するのだということが、本当の意味で理解でないでいるのです。ある人がこう証ししていました。「"It's not about you." ということばを読んで、突然ぶんなぐられたような気持ちになりましたが、その時、私の人生は私のためにあるのでなく、神の目的のためにあるのだと言うことに、気付きました。」そのように、神が第一のお方であり、キリストが私の主であるということを確認し、自分の人生を神に明け渡すことが礼拝なのです。礼拝とは、神に向かって "It's not about me. It's all about you." と言い表わすことなのです。

奉仕も、礼拝も、英語では共に "service" と言います。奉仕も、礼拝も、同じように、神にささげるもの、神のためになされるものです。ところが、奉仕が礼拝に基づいていないと、それが単なる活動で終わってしまいます。「活動」というのは、それによって、自分を高めたり、生きがいを見出したりするもの、自分のためのものです。ある人は芸術活動に、ある人は教育活動に、ある人は社会福祉の活動に励みます。それぞれに、自分の人生に喜びを与え、また、人にも喜ばれるのでしょうが、神への奉仕、教会での奉仕は、そうした「活動」とは一線を画すものがあります。教会での奉仕は、世の中でさまざまに活動している人が、その活動の場を教会に広げるとか、世の中の活動を教会に移すということではないのです。生きがいの場を教会の活動に見つけるというのでもありません。クリスチャンの生きがいは神ご自身であって、決して教会の活動であってはならないのです。

以前、ある教会のパーティである人と同じテーブルにすわりました。彼には、ティーンエージャの子どもがいて、そのころ、私の娘たちもそれぞれティーンエージャーだったので、自然と話がこどものことになりました。その時、彼は、こどもにいろんなスポーツや習い事をさせていて、「子どもは忙しくさせておけば悪いことをしないからね。」と話してくれました。私は、それに反論はしませんでしたが、心の中では、「果たしてそうかな？」という疑問を持ちました。後になって、「教会の活動に忙しくしていれば、教会につながっていることができるのだ。」という考え方を聞いて、教会の奉仕とはそういうものだろうか、活動が信仰の成長を妨げ、その忙しさが人々を教会から遠ざけるということもあるのではないかと思うようになりました。世の中では「忙しそうですね。」というのは、ある意味で「誉め言葉」なのかもしれませんが、信仰の世界では、ただ忙しくしている、活動に没頭するということは、決して健全なことではないのです。神は、私たちに「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」（出エジ

プト記 20:8）と命じておられます。安息日、つまり、礼拝の日は、人間の活動を停止して、神に働いていただく日です。礼拝において、自分の活動、自分のための活動を神にささげてこそ、そこから、神と共に働き、神のために働く、本当の意味での奉仕が生まれてくるのです。私たちの奉仕は、自分を神に明け渡す礼拝から出ているでしょうか。そのことを、もう一度、点検してみましょう。

二、奉仕とまじわり

奉仕は、第一に、神のためのですが、第二には、他の兄弟姉妹のために、教会全体のためにするものです。ローマ人への手紙は、奉仕について教える前に、「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」（ローマ 12:5）と言って、教会がキリストのからだであることを教えています。そして、このキリストのからだである教会のまじわりの中で、奉仕をささげなさいと勧めています。奉仕は、キリストのからだを建てあげるものであり、また、教会のまじわりに仕えるものでなければならないのです。

しばしば、「奉仕は『賜物によって』なされるのだから、自分の賜物を大いに発揮すればよいのだ。」と言われます。近年、教会で「聖霊の賜物」が強調されていることは、とても良いことですが、それが、正しく理解されないで、「賜物」と「人間の能力」とが混同されることがあるのは、残念です。聖書で「賜物」というのは、聖霊によって与えられる霊的な力のことで、決して生まれつきの能力のことではありません。聖霊が与えてくださったものを、聖霊によって正しく用いるなら、それは、教会を建てあげ、他の人々の祝福になるのですが、もし、賜物を人間的な能力と取り違えてしまうなら、あの人の能力と、この人の能力、あの人がやりたいことと、この人のやりたいことが衝突してしまいます。しばしば私たちは、ある一つの活動やその時のプログラムだけに没頭してしまい、教会全体のことを見失ってしまうことがあります。どんな奉仕も、全体のために役立ってこそ意味があるのですが、全体のことよりも、自分たちの立てた目標を達成することに気をとられてしまうことがあります。しかし、それは、本当の奉仕の姿勢ではありません。

私がまだ神学校の学生だったころ、宇田　進先生に会うために、先生が牧会しておられた教会に行ったことがあります。宇田　進先生は、今はもうリタイヤしておられますが、そのころ、日本の福音派の中では数少ない神学博士のひとりで、福音主義神学の中心的な存在として活躍しておられました。その日は、その教会の大掃除だったので、先生は、私が行って挨拶するまで、雑巾を握って礼拝堂の座席を磨いていました。それを見たその教会のメンバーは、「先生、先生。そんなことは私たちがします。」と言って、先生の手から雑巾を取り上げましたが、先生はただニコニコしていただけでした。宇田先生には「神学」という素晴らしい賜物が与えられていました。しかし、先生は、「自分は自分の賜物だけを磨けばよい。」とは思っていませんでした。みんなで掃除をする時には、自分もその奉仕に加わりたいと考えていました。先生にとって、自分の賜物、自分の仕事、自分の計画よりも、キリストの教会を建てあげることのほうがもっと大切だったです。リック・ウォレン師は「主イエスはあなたの奉仕を建てあげるとは約束されませんでした。ご自分の教会を建て上げると約束されたのです。」と書いています。自分の「奉仕」の完成が目的ではなく、教会が建てあげられることが、奉仕の目的であるということを心がけて奉仕に励みたいものです。

三、奉仕と信仰

第三に、奉仕は信仰に基づいてなされ、信仰の成長のためになされるものです。ローマ人への手紙は、私たちは「賜物に応じて」だけでなく、「信仰の量りに応じて」奉仕すると教えています。3 節に「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」とあり、6 節には「もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。」とあります。ここで言われている「信仰の量り」とは、その人の信仰の成長の度合いを意味します。教会は信仰者のまじわりですから、教会での奉仕のあり方は、この世の他の団体とは違っていますし、違っていなければならないのです。この世の他の団体では、能力のある人が喜ばれ、時間のある人が重宝がられ、進んで「やります。」と名乗り出る人が歓迎されます。しかし、教会では、奉仕をする人にまず求められるのは「信仰」です。初代教会で、やもめへの配給の問題が起こった時、そのための奉仕者を選ぶ時、何を基準にして奉仕者が選ばれたでしょうか。学歴や、職歴、その人がその分野での専門家であるということで選ばれたのではありませんね。使徒たちが奉仕者たちに要求したのは、「御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち」であり、人々が選んだのは「信仰と聖霊とに満ちた」人々でした（使徒 6:1-6）。教会は人々が信仰を育てる場ですから、そこで奉仕する人にまず求められるのは、信仰なのです。一般の活動は、能力があれば出来るのかもしれませんが、奉仕は信仰なしにはできません。一般の活動では能力のある人がリーダーシップをとりますが、教会の奉仕では、信仰の訓練を受けている人が、リーダーシップをとるべきであると、聖書は教えています。奉仕の責任を与えられている人は、それが、どんな種類の奉仕であれ、自分に与えられた奉仕が、神に喜ばれ、また、教会を建てあげる奉仕となるために、みことばの学びに、また祈りに励まなければなりません。自分の奉仕分野での技能を延ばすこと以上に、奉仕者自身の信仰を成長させることが、実りのある奉仕への道です。

聖書は、教会の指導者はどのような人であるべきかについて、さまざまなことを書いていますが、その中に「また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」（テモテ第一 3:6）という警告があります。私も、年若くして牧師になりましたので、このことばの意味が良く分かりました。神は、いつも、私に「思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」と教えてくださいました。もし、私が自分の信仰がそこまで至っていないのに、大きなことをしようとしたり、自分でも聖書をよく理解していないのに、大説教家を真似て説教していたら、決してその働きに実りはなかったでしょう。私は、神が、奉仕者に求めておられるのは、何よりも、自分の信仰の成長の度合いに応じて主に仕える、謙虚さであることを、身にしみて感じています。

しかし、「信仰の量りに応じて」ということが、奉仕をしないことの言い訳けになってはいけません。「私の信仰は、まだまだです。ですから、そのような奉仕はできません。」と言ってはいけないのです。私の母教会の牧師は、よく、「それは謙遜的傲慢です。神が、あなたを信頼して、奉仕を任せようとしているのですから、あなたも、神に信頼し、その奉仕によって信仰を成長させなさい。」と教えていました。「信仰の量り」というものは決して固定したも

のではありません。それは、大きく、豊かにしていかなくてはならないものです。神は、私たちに、「とても出来ない」と思えるような奉仕を与えることがありますが、それは、それによって、私たちに神に頼ることを教え、信仰を成長させ、信仰の量りを大きくしてくださるためなのです。自分の得意なこと、やりたいことだけをしていると、いつしか、神よりも自分の力に頼り、神に仕えることよりも、奉仕を自己実現の手段にしてしまいかねません。神は、私たちに苦手なことや、人間的な能力以上の奉仕を与えることがありますが、それは、信仰を成長させる絶好の機会です。それを逃してはならないと思います。

私が日本で、20 名ほどの人を株分けして、伝道所を始めた時、伝道所の宣伝を兼ねてトラクトを配る計画を立てました。メンバーが自分の住んでいる地域にトラクトを配ることにし、それぞれが、トラクトの束を持って帰りました。ところが、ひとりの姉妹だけが、「先生、私は、教会のお掃除でも、台所のことでも、何でもしますから、これだけは勘弁してください。『あの人はキリスト教の布教活動をしている。』と、近所の人の噂にされるのが嫌なのです。」といった意味のことを言いました。彼女は、教会のためによく奉仕をする人でしたが、この奉仕は、いろんな意味で、彼女にとってチャレンジだったのでしょう。彼女は、最初ずいぶん頑固にこの奉仕を拒否したのですが、しばらくたってから、神に教えられ、この奉仕を引き受けるようになりました。そして、彼女はそのことによって信仰を成長させ、その後も忠実に伝道所のために働き続けてくれました。リック・ウォレン師は、奉仕を選ぶ時、「自分の心がそこにあるもの」を選べばよいと言っています。それは、ある程度の規模の教会には良いサジェスションですが、小さな規模の教会では、教会を支えるのになくてならない必要がたくさんあり、それすらも満たされていないというのが現状ですから、そのような教会では、自分がしたいと思うことよりも、教会が必要としているところを満たしていく奉仕が求められます。教会の欠けたところを補おうとする教会への愛が求められます。まずは、教会に必要とされている分野に目を留め、そこに自分の心を置いていきましょう。

聖書は、「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。」（コロサイ 3:23）と教えています。これは、一般の仕事においても、「主に対してするように、心から」働くようにとの教えなのですが、一般の仕事においてこう教えられているのなら、教会での奉仕はなおのことです。主のために、教会のために、信仰によって奉仕をささげましょう。もし、成功することが関心事であるなら、それは活動であって、奉仕ではないでしょう。誰も誉めてくれず、感謝もしてくれないというので、止めてしまうなら、それも、活動であって、奉仕ではないでしょう。自分のしたいことをするだけなら、活動であって、奉仕ではないでしょう。コロサイ 3:24 は「あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。」と言っています。この報いを信じて、主への奉仕に励み、主キリストに仕えましょう。

（祈り）

父なる神さま、私たちの教会には数多くの活動があり、多くの人々がそれに携わっています。人の目には、「活発な教会」として映ることでしょうが、それらが単なる活動で終わっているなら、それは、私たちの益とはなっても、あなたの栄光にはならず、霊的な実を結ぶものとはならないことでしょう。主キリストに仕える奉仕のあり方を、もう一度、私たちに教えてくだ

だい。あなたが必要としておられることを、あなたに対して忠実に果たす私たちとしてください。すべてのものの主でありながら、私たちのしもべとなって仕えてくださった、イエス・キリストのお名前で祈ります。

2/27/2005

ディスカションのために

1. 奉仕において、しもべの態度を持つことはなぜ大切なのでしょうか。
2. 「信仰の量りに応じて」奉仕するというのは、あなたの場合、どのようなことを意味していますか。
3. 教会の必要を知らなければ、教会の必要を満たすために奉仕することができません。どのようにしたら教会の必要を知ることができるでしょうか。

救われるには

ローマ 10:9-13

10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。
10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。
10:11 聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」
10:12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。
10:13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

「目的の四十日」も、折り返し点を通過しました。みなさんの毎日のデボーションはいかがでしょうか。礼拝では、「５つの目的」を前もって学んでいますが、今日は、第五の目的、「私たちは使命のために造られた。」を取り上げます。日本語で、「使命」と訳されている言葉は、英語では "Mission" で、"Mission" という言葉は、「５つの目的」では、「宣教」という意味で使われています。ですから、第五の目的は、「私たちは宣教のために造られた。」と訳しても良いと思います。また、第五の目的のキーワードは「伝道」ですから、第五の目的を「私たちは伝道するために造られた。」とも、言い換えることができます。

"Mission" と言うと、私は、"Missionary"（宣教師）という言葉を思い起こします。スエーデンから来た若い女性の宣教師によって、信仰に導かれたというあかしを、昨年、ある姉妹がしてくれました。その姉妹は、あかしの中で、この宣教師は、遠い国から、言葉も文化も違うこの国に、また誰一人知る人のいないこの町に、なぜやってきたのだろうと、不思議に思ったと話していました。今でこそ、世界が狭くなり、飛行機で自由に行き来できる時代になりましたが、数十年前までは、宣教師たちは、船に乗り海を越え、馬に乗って山を越え、何ヶ月もかかって宣教の地まで行ったものです。そして、たいていの宣教地には、困難が待ちかまえていました。赤道直下の国、エクアドルのアウカ人に伝道しようとした宣教師たちは、伝道する前に現地の人々に殺されてしまいました。しかし、残された宣教師夫人たちは、それにもひるまず、なおも現地の人々に伝道し続け、ついにそこに教会が建てられました。このことは、その宣教師夫人のひとり、エリザベス・エリオットが書いた『ジャングルの五人の殉教者』に詳しく描かれています。この人たちは、なぜ、それまでして、伝道したのでしょうか。それは、伝道が、彼らの使命であり、また、愛のためであり、伝道なしには、人は救われないことを知っていたからでした。第五の目的で「伝道」ということを学ぶにあたって、まず、私たちはなぜ伝道するのかということを確かめておきましょう。

一、伝道の使命

私たちは、なぜ伝道するのでしょうか。それは、まず第一に、主イエス・キリストによって与えられた使命だからです。主は、弟子たちに「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」（マタイ 28:19-20）と命じ、また、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさ

い。」（マルコ 16:15）と言われました。"Mission" という言葉が「宣教」とも「使命」とも訳されるのは、キリストが教会に与えた使命がじつに宣教だったからです。教会の使命は宣教であり、宣教は教会の使命です。ですから、伝道は、してもしなくてもよいようなものでも、できればしたほうがよいというものでもありません。それは、キリストが教会に命じられたもので、しなければならないものなのです。使徒パウロは、紀元一世紀の地中海世界のいたるところで伝道してきた人ですが、彼は、「私は、ギリシャ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならない負債を負っています。」（ローマ 1:14）と言っています。伝道は、彼の義務であり、教会の義務であるというのです。使徒パウロは、「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならないことだからです。」（コリント第一 9:16）とも言っています。

伝道の使命は、使徒パウロやキリストの弟子たちだけに与えられたものではありません。それは、すべてのクリスチャンに、いつの時代の教会にも与えられています。私たちにも与えられているのです。会社の看板に "Since 1955" などと、創立年が刻まれていることがあります。「私たちは、1955 年以来、50 年間ビジネスを続けています。」という意味なのでしょう。このごろは、会社の名前は同じでも、全く違ったビジネスをしているところもあるので、"We are in the same business in 50 years." などと宣伝されることもありますが、教会は、50 年どころか、もっと、長い間、二千年もの間、「伝道」という同じひとつのビジネスに専念してきました。私たちは、"We are in the same business in 2000 years!" と言うことができるのです。また、多くの企業は、たとえば、「私たちのミッションは、安全で、環境にやさしい製品を作ることです。」などという、「ミッション・ステートメント」を掲げています。教会には、二千年間、変わらないミッションがあります。それは伝道というミッションです。もし伝道しなければ、教会は、他のどんなことをしていたとしても、教会でなくなってしまいます。私たちには伝道という使命が与えられているのだということを、まず、自覚させていただきましょう。

二、伝道と愛

第二に、私たちは、神の愛のゆえに伝道します。神が、私たちに伝道を命じておられるのは、ひとりでも多くの人が罪とその結果から救われて欲しいと、愛をもって願っておられるからです。テモテへの手紙第一 2:4 に「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」とあり、ペテロの手紙第二 3:9 には、「主は、…ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」とあります。

時代は、どんどん悪くなっています。昔は、家に鍵などかけなくても良かったのに、今は、いくつも鍵をかけ、アラームシステムをはりめぐらすようになってきました。凶悪な犯罪が日常のことになり、二組に一組の夫婦が離婚し、家庭が壊れています。子どもたちは自制が効かなくなり、生きる目当ても、希望も無くしています。人の心が冷たくなり、ゆがんでしまい、本当は互いに愛し合うべき家族がいがみ合っています。互いに認め合い、尊敬しあう正しい人間関係を持つことができないで、人間関係というと、他の人を利用したり、支配することだと思っている人がどんどん増えています。人間関係が利害関係になっているのです。人の心が病んでいるのです。人の心が病んでいるだけではありません。病んだ心を持つ人間が住む、この世界も病んでいます。自然界は人間の欲望のため破壊され、その結果、様々な災害が起こり、

以前は無かったような病気が増え続けています。医学は発達しました。しかし、医学の発達が追いつかないほど、難しい病気が増え、人々は、苦しみ、うめいています。

人類の歴史は、罪の歴史です。人間はいつの時代も頑固で、罪を認めようとはしませんでしたが、それでも、一昔前までは、人々は聖なる神への恐れを持っていました。まだ、良心が機能していて、罪の意識がありました。しかし、現代は、聖なる神に対する恐れも、自然に対する恐れも、生命に対する畏敬もどんどんうすれ、消えかかっています。時代が悪くなればなるほど人は、人間の罪深さを認めなければならないのに、逆に、人はますます罪を認めなくなっています。大きな災害が起これば起こるほど、人間は、その無力を覚えてへりくだらなければならないのに、どんどん高慢になっています。世界中で戦争が起こり、お互いに殺し合っているのに、人間はまだ、自分たちの愚かさを認めることができないでいるのです。神は、そんな人間をたちどころに滅ぼしてしまっても良いのに、今の今まで忍耐して、神のもとに立ち返るのを待っておられます。いいえ、ただ待っておられるだけでなく、宣教師を派遣し、伝道者を送り出し、教会の伝道を、クリスチャンのあかしを用いて、人々を救いに招いておられます。

伝道とは、神が私たちを救おうとしておられるこの愛に動かされて、この愛を人々に伝えることです。使徒パウロは、同民族のユダヤ人のために、こう言っています。「私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」（ローマ 9:1-3）パウロが、どんなにか神に愛され、キリストを愛していたかは、聖書を読めば分かることですが、そのパウロが、この神の愛から、キリストから引き離されても良いとさえ言っています。それは、彼がそれほどに、同胞ユダヤ人の救いを切に願ってのことでした。パウロはすべての人の救いを願っておられる神の心を自分の心として伝道していたのです。

辞書によると、「伝道」という言葉は、キリスト教が日本に入ってきてからできた言葉のようです。他の宗教では「伝道」と言わず「布教」と言います。よく、「仏教は穏やかで、伝道なんかしない。」と言われますが、仏教にも、「折伏」という言葉があります。これは、間違った教えを持っている人をただして、仏とその教えに立ち返らせることを言います。クリスチャンが、真理を弁明したり、人々に悔い改めを促すのと同じ意味です。仏教にも、言葉は違っていますが、「伝道」という概念があるのです。しかし、その内容は大きく違っています。多くの宗教では、「伝道」とは、その宗教の信者を獲得するためのものです。数多くの信者を獲得し、その宗教が、社会的に認められると、そこで伝道は終わってしまいます。ところが、教会は、313 年、ローマの皇帝、コンスタンティヌスによって認められ、信仰の自由が保障された後も、伝道をやめませんでした。それは、ひとりでも多くの人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられる、神の愛によって、教会が動かされていたからです。

リック・ウォレン師の父親もまた牧師でしたが、彼は、臨終のベッドで、何度も何度も "One more soul for Jesus." と叫びました。ひとりでも多く、救い主イエスのもとに立ち返って、救われる人が起こされるように、この願いが、リック・ウォレン師の父親の心からの願いでした。この神の愛が、私たちを動かしているので、私たちは伝道するのです。"Purpose Driven

Life"? それは、同時に "Love Driven Life"（愛に駆り立てられる人生）なのです。

三、伝道と救い

私たちは、第一に、それが私たちの使命であるので伝道します。第二に、神の愛が私たちを駆り立てているから伝道します。そして、第三に、私たちは、神が伝道によって人を救われるから、伝道以外に人が救われる道がないから伝道するのです。

ローマ 10:9-10 は、人はどうして救われるのかをはっきりと書きしるしています。ここでは、人が救われるには、まず、イエス・キリストを知る必要があると教えられています。「あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われる。」とありますが、イエス・キリストについて聞くことなしに、どうして、人は、イエス・キリストを信じることができるでしょうか。伝道がなくて、どうして、人は、今から二千年前、ユダヤの国に生まれたイエスが、キリストである、主であると知ることができるでしょうか。キリストの十字架が、私たちの罪の身代わりであったことを、どのようにして理解するのでしょうか。誰かが、イエス・キリストを伝えなければならないのです。伝道なしには誰も、イエス・キリストが十字架の死から三日目に復活し、今も生きておられることを信じることはできないのです。

また、この箇所は、救われるために、私たちがしなければならないことが二つあると教えています。ひとつは口でイエス・キリストを主であると言い表すこと、もうひとつは、心でイエス・キリストは死から復活されたということを信じることです。「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」とあります。心で信じているだけでも、口で告白するだけでもだめなのです。主イエスは、信仰を口にしながら、心では信じていない人に対して「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」（マタイ 7:21）と言われ、心で信じていても、その信仰を言い表さない人について、「ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」（マタイ 10:32-33）と言われました。キリストは、頭で分かっていることを、心で信じるように、心で信じていることを、口で言い表せるほどになることを神は求めておられます。つまり、心と言葉が一致する時、人は救われるのです。しかし、伝道がなされなくては、誰も信仰の告白に導かれることはできません。「告白する」ということは、その告白を聞く誰かが必要なわけですから、そこに、伝道する人が必要なのです。私たちも、私たちに福音を語ってくれた人がいたので、キリストを知ったのです。キリストへの信仰に導いてくれた人がいたので、「イエス・キリストは主です。」と言い表すことができたのです。今度は、私たちが、他の誰かに同じことをしてあげる番ではないでしょうか。

使徒パウロがアテネの町で伝道し、イエス・キリストは復活されたと語った時、多くの人々は、パウロをあざ笑い、パウロの語った福音を愚かなものとしました。しかし、福音を信じた

人々は、救われたのです。（使徒の働き 17 章）人々は、伝道を嫌い、福音を馬鹿にするかもしれません。教会が、慈善事業や、福祉、教育、芸術の分野で活動している間は、社会に受け入れられ、喜ばれるのかもしれませんが、ひとたび、伝道に励むようになると、教会やクリスチャンは、人々から敬遠されるようになるかもしれません。しかし、私たちは、福音を語りつづけます。伝道し続けます。なぜなら、福音を伝えなければ人は救われないからです。人々が福音に耳を傾けてはくれないだろうと言うので、ほかのことを語ったとしても、それで人は救われるわけではありません。伝道が困難だからと言って、教会が他の事業に乗り出したなら、いったい誰が、人々の救いのために働くのでしょうか。パウロは言っています。「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」（コリント第一 1:21-24）福音は、人を救う神の力であり、福音を宣べ伝える伝道は、神の力を持ち運ぶ唯一の方法です。

「神の力」とある「力」はギリシャ語で「デュナミス」と言います。この「デュナミス」という言葉から「ダイナマイト」という言葉が生まれました。ダイナマイトは、ノーベル賞を作ったスウェーデンのアルフレッド・ベルナルド・ノーベルによって発明されました。ノーベルは、通常ではすぐに爆発してしまうニトログリセリンを安全に運ぶため、それをケイソウ土に染み込ませるという方法を考えついたのです。ケイソウ土というのは、珪藻（けいそう）と呼ばれる植物プランクトンの化石から出来上がったもので、吸水性、吸着性に優れるという特性があって、それがダイナマイトに利用されたのです。その後、軍事用には、ニトログリセリンよりも、もっと爆発力の強いトリニトロトルエンが使われ、それは、略号で "TNT" と呼ばれますが、実は、ローマ 10:9-10 も "TNT" なのです。「ローマ人への手紙 10 章 9 節、10 節」を英語では "Romans Ten Nine Ten" と言いますので、"Ten Nine Ten" の頭文字をとって "TNT" というわけです。イエス・キリストの十字架と復活を信じ、イエス・キリストを「主よ」と、真心から呼び求めるものに、神の救いの力、デュナミスが届くのです。ダイナマイトのニトログリセリンがケイソウ土に染み込んでいるように、福音には、人を救う神の力が染み込んでいます。この福音によって、人は救われます。ですから、私たちは、この福音を伝え、伝道するのです。パウロは言いました。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」（ローマ 1:16）私たちも、パウロと同じように、福音に人を救う神の力があることを確信して、この福音を伝える、伝道に励みましょう。

（祈り）

父なる神さま、私たちは、イエス・キリストの福音を聞き、それを信じて救われました。それは、誰かが私たちに福音を語り、私たちを信仰に導いてくれたからです。今度は、私たちが誰かに福音を語り、誰かを信仰に導きたいと、願っています。そうすることが、私たちに与えられたあなたからの使命であることを深く教えてください。その使命の背後に、人を救おうとしておられるあなたの大きな愛があることを悟らせてください。そして、この福音が人を救う

ものであることを確信させてください。誰に、どのようにして伝道すれば良いのかを教え、伝道する力を与え、導いてください。私たちを、神の力を持ち運ぶ器として選んでくださった、主イエスのお名前で祈ります。

3/6/2005

ディスカションのために

1. **使徒パウロはどのような情熱をもってユダヤ人の救いを願っていましたか（ローマ** 9:1-5、10:1 **参照）。**
2. **使徒パウロには、ユダヤ人の救いについて、どのような確信を持っていましたか（ローマ** 12:12-13）。
3. **私たちに、使徒パウロと同じような情熱や確信が欠けているとしたら、どうしたらそれを得ることができるでしょうか。**

遣わされなければ

ローマ 10:14-15

10:14 しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。
10:15 遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」

一、伝道の必要性

先週だったと思いますが、ABC ニュースで、日本の Suicide Club のことが紹介されていました。これは、インターネットでいっしょに自殺する人を誘うというもので、車の中に閉じこもって、一酸化炭素中毒で自殺を図るという事件が何度も起こっています。今年の 1 月 28 日に厚生労働省が発表したところによると、2003 年の自殺者は 32,109 人で、過去最高だったそうです。2003 年の交通事故による死亡者が約 8,000 人ですから、自殺者は、交通事故で亡くなった人の四倍に達します。1 日に 100 人近い人々が自殺をしており、未遂の人も入れると、とんでもない数字になるでしょう。日本は、人口に占める自殺者の割合が先進七カ国の中では第一位です。秋田県は日本でも一番自殺者が多いところで、このため、秋田大学では、全学生を対象に自殺防止のための講座を開くことになったそうです。ABC ニュースの、このトピックの最後に、Yoko という、何度も自殺未遂を経験し、今は精神科で治療を受けている若い女性が、たぶん東京だと思いますが、街角に立っている映像が映し出され、レポーターが「Yoko は、今でも死にたいと願っています。」と語っていたのには、やりきれない気持ちになりました。自殺したいと願っている人に、「自殺はいけない。」と言うだけでは、説得力はありません。「なぜ人は生きるのか、生きなければならないのか。」という明確な答えが必要です。そして、その答えは聖書の中にあり、キリストのうちにあります。自ら死を選ぼうとする人たちが、キリストを知っていたらと思います。皆さんも、きっと同じ気持ちでしょう。自殺をする人ばかりではありません。最近、破廉恥なことをして国会議員の地位を棒にふってしまった人がいますが、その人も、もし、キリストを知っていたら、そんなことをしなくて済んだかもしれません。凶悪な犯罪を犯した人であっても、もし、その人がキリストを知っていたら、そんなに大きな罪を犯さなくて済んだかもしれないのです。最近は親が子を、子が親を、夫が妻を、妻が夫を殺したりという暗い事件がいくつもあります。その中には、子どもの暴力に耐えかねてのことだったり、病気の配偶者を世話しきれなくなってという場合もありますが、もし、そうした人々がキリストを知っていたなら、きっと別の解決を見つけることができただろうにと思います。

ローマ 10:13 に「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」とあるように、どんな苦しみ、どんな問題の中にある人であっても、主の御名を呼び求める者、つまり、イエスは救い主キリストであると心に信じ、「イエス・キリストは主です。」と口で告白し、悔い改め、へりくだって祈る者は、だれでも救われるのです。主イエスは「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」（ヨハネ 14:14）と約束してくださっています。どんなことでも、キリストのお名前によって祈ることができます。何をど

う祈ってよいかわからない時でも、「主よ、主よ。」と主の名前を呼び続けるなら、その祈りは主のもとに届くのです。

しかし、誰かがその人たちにキリストを伝えなかったら、その人たちはキリストを信じて、祈ることが出来ないのです。ローマ 10:14 に「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。」とあります。これを逆に言えば、キリストを語る人がいなければ、キリストのことを聞くことはなく、キリストのことを聞かなかったら、キリストを信じることもないのです。ローマ 10:17 に「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」とある通りです。そして、キリストを信じることがなければ、キリストを呼び求めることもなく、キリストを呼び求めることがなければ救いはないのです。こんなに素晴らしい救いがあるのに、もしそれを語ること、伝えること、知らせることがなければ、人は救われないのです。

ある人からこんな話を聞きました。その人は、あることで悩み、救いを求めて、自分ひとりで教会に来ました。そして、キリストに救いがあることを発見することができました。すると、同じ教会にふだん親しくしている友だちがいました。その人は、自分の友だちが実は、クリスチャンで、同じ教会に以前から来ていたのです。その人は、最初「知っている人がいて良かった。」と思ったのですが、しばらくして、少し不愉快な気持ちになったというのです。その人は、友だちに「あなたは、私の友だちで、私が悩んでいるのを知っていたのに、どうして私にキリストのことを話してくれなかったのですか。あなただけが教会に来て、どうして私をさそってくれなかったのですか。」と言いたかったというのです。私たちは、友だちから同じことを言われることがないように、普段から、機会をとらえて、自分がクリスチャンであること、キリストに救いがあることを知らせておきたいものです。聖書は、「宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。」と言っています。これは、神が、私たちに、伝道する者になって欲しいと願っておられる、その願いを表していることばです。私たちの周りには、キリストを知らない人が大勢います。苦しみのただ中にある人、破滅に向かっている人たちがいるかもしれません。その人たちがキリストを知るなら、その人たちの人生は大きく変わることでしょう。あなたの身近な人には、あなたが「宣べ伝える人」とならなければ、他の誰も代わることができないのです。『５つの目的』は、私たちに、そうした伝道の使命が与えられていると、教えています。この使命を、今朝、もう一度確認しておきたいと思います。

二、伝道の準備

しかし、自分に伝道の使命が与えられているということが分かったからと言って、すぐに伝道できるとは限りません。伝道しなければならない、伝道したいと願っていても、いったい、何をどう話せばいいのか分からない場合もあります。また、話すべきことが分かっていても、こんなことを話しても拒否されるのではないかという恐れが起こって来ることもあるでしょう。そうしたことを乗り越えるためには、伝道のために整えられている必要があります。聖書は「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。」（ローマ 10:15）と言っていますが、「遣わされる」という言葉の中には、整えられる、備えられるという意味も含まれています。伝道するためには、自分のためにも、伝道しょうとしている人のためにも祈る必要

があります。また、聖書を学ぶ必要があります。伝道していて、難しい質問を浴びせられることもありますから、牧師や他のクリスチャンのサポートが必要でしょう。教会では、そうした祈りの場、学びの場がありますから、礼拝と共に、学びの場に進んで出ていただきたいと思います。しかし、そうしたものと共に持っていなければならないものがあります。それは、救いの確信と、きよめの体験です。

キリストを伝えるということは、数学や歴史を教えることとは違います。伝道は、たんに客観的な真理を伝達することでは終わりません。自分の救いの体験を通して、キリストを語ることです。それは、もっとパーソナルなものです。ですから、『５つの目的』では、「パーソナル・ヒストリーを通してキリストを伝える。」とあります。テレビで観たものや本で読んだことを人に教えるのと、自分が直接見たこと、聞いたこと、体験したことを語るのには、大きな違いがあります。「私はキリストによって救われました。このように変えられました。私の生活にはキリストが共にいてくださいます。」というあかしには、力があります。自分が体験したことは、情熱を持って語ることができ、その情熱によって、真理が相手に伝わるのです。自分自身がキリストの救いについてあやふやでは、力をもってキリストを伝えることはできません。

また、キリストの救いを確信していたとしても、私たちの中に、神に喜ばれない罪があったり、利己的な思いがあったり、人を恐れる思いがあるなら、それもまた、私たちがキリストを伝えるのを妨げます。そうしたものからきよめられる、きよめの体験が必要です。預言者イザヤは、神から遣わされる前に、きよめの体験をしています。彼は、神殿で聖なる神に出会い、神の栄光に触れました。その時、イザヤは「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。」（イザヤ 6:5）と叫びました。イザヤは、聖なる神のことばを語るにふさわしくないことを心底から認めたのです。しかし、同時に、イザヤは、「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」(イザヤ 6:7)という声を聞き、罪の赦しときよめを確信しました。私たちにも、イザヤのような体験が必要です。イザヤと同じ体験と言っても、そっくり同じ体験をしなければならないというわけではありません。体験は、ひとりびとり違います。大きな体験もあれば、小さな体験もあります。また、きよめの体験は、一度限りというものではありません。生涯の中で何度か繰り返されます。それは、繰り返されるたびに深められるものです。それは、賛美をささげている時に心が燃えてくるような体験かもしれません。開いた聖書のことばに心を奪われ、それに釘付けになるということかもしれません。祈っている時に涙が止まらなくなってしまうこともあるでしょう。しかし、どんな体験であれ、きよめの体験には、罪を示され、それを悔い改めること、自分の知恵や力に頼ることをやめて、神のことばに聞き従い、神に信頼することが含まれていま。私たちが語る福音の中心は、キリストが私たちの罪のために死んでくださったこと、私たちの救いのために復活してくださったことにあります。つまり、罪からの救い、罪の赦しが福音の主題です。罪を認め、それを悔い改める体験なしには、罪からの救い主イエス・キリストを語り、罪の赦しの福音を語ることはできません。伝道するのに、聖書の知識が多くあればそれにこしたことはありませんが、どんなに、多くの知識を持っていても、こうした罪の赦しの体験がなければ、他の人をキリストに導くことはできないのです。

イザヤは、この体験の後、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と

いう主の声を聞き、「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」と答えました。「きよめ」があってはじめて神からの「使命」に応答することができるのです。「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。」とあるのは、きよめられた心で神からの使命に応答することを意味しています。神は、私たちに伝道を命じておられます。私たちも、伝道したいと願っています。そうであるなら、神は、私たちに語ることばも、その方法も、そして何よりも伝道のための力を与えてくださらないわけはありません。私たちも、「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」と神にこたえ、神の備えを受けようではありませんか。

三、伝道の栄光

今朝は、第一に「宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。」（ローマ 10:14）ということばを、第二に「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。」（ローマ 10:15）ということばについて考えましたが、最後に「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんと りっぱでしょう。」ということばに目を留めましょう。

ふだん、「足」は、「なんとりっぱでしょう。」とほめられることはあまりありません。しかし、聖書では、「足」がほめられ、大切なものとされています。教会は、キリストのからだで、教会に属するクリスチャンのひとりびとりは、キリストのからだの各部分です。コリント第一 12 章は、そのようなキリストのからだの一致について教えているところですが、そこには「たとい、足が『私は手ではないから、からだに属さない。』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が『私は目ではないから、からだに属さない。』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。」（コリント第一 12:15-16）とあります。一般には足は身体の低い部分にあって、手よりも低く見られますが、実際は、足がからだ全体を支えているのです。足が弱ると、心臓から送られた血液を、再び心臓に送り返すことができなくなり、からだ全体が弱ります。「足は第二の心臓」とも言われ、「からだは足から弱る」とも言われます。キリストのからだでも、目立たなくても、足のようにからだ全体を支えている人々を、神は大切にしてくださいます。

「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」ということばに戻りますが、「良いことの知らせ」そのものは、口で伝えるのですから、「口」がほめられても良いのかもしれませが、ここでは「足」がほめられています。なぜでしょうか。このことは、皆さんもよくご存じの「マラソン」の由来が良く言い表しています。紀元前 450 年、ペルシャのダリウス一世は、数万の大軍をアテネに近いマラトンの野に上陸させました。アテネは名将ミルティアデスに導かれた約一万の重装歩兵をもってこれを迎え討ちました。大激戦の後、ついにアテネはペルシャ軍を撃ち破りました。この時、フェイディビデスという名の兵士が、勝利の知らせをアテネの町まで伝える伝令の役を命じられました。彼は、およそ 36 キロの道のりをひたすらに走り続け、アテネの町に着いた時、ただ一言「わが軍勝てり。」と叫んで息絶えたというのです。「マラトン」という地名から「マラソン」という競技の名前が起こりました。このように、古代には、人々は、伝令の「足」によって情報を得ました。伝令が遠くから駈けて来て、町を見下ろす丘の上に立つ、その足に、人々は注目したのです。情報は、生きた人間が実際に足を使って伝えるものだったのです。

現代は、情報は、テレビやラジオ、インターネットや新聞などによって伝えられ、福音もまた、こうしたメディアを通して、伝えられています。皆さんの中にも「みえますか愛」のテレビ番組を見て教会に来るようになった人がいることでしょう。私も、神を求めるきっかけになったのは、クリスチャンのラジオ番組でした。神は、こうしたメディアを用いてくださいます。しかし、神が、人を信仰に導かれる時には、人を用いられます。特別な場合は別として、メディアは伝道のきっかけとしては用いられても、それは、人を悔い改めや信仰に導くことはありません。人は何かをする時、物（Material）、金（Money）、方策（Method）に頼ります。しかし、神は常に人（Man）を用いられます。ある人が「伝道とは人格から人格へとイエス・キリストというご人格を伝えることである。」と言いましたが、おひとりの人格を他の人格に伝えるには、どうしても「人」が必要なのです。

しかし、神が、伝道のために私たちを必要としておられるというのは、よく考えてみるとおそれおおいことです。救いは、神の主権と愛によって備えられたもので、そこには人間の知恵や努力が入り込む余地は少しもありません。なのに、神が、救いの計画のなかに、私たちの伝道を組み入れてくださっているのです。もし、私たちが伝道しなければ、神の計画も、キリストの十字架の苦しみも無意味なものになるかもしれないのに、神は、私たちを信頼し、伝道を私たちに任せてくださったのです。これは、なんと驚くべきことでしょうか。天使は完全な存在ですから、神は天使に福音を伝えることを任せてもよかったのかもしれません。しかし、神は、不完全な人間にそれを任せました。なぜでしょうか。天使には罪がなく、罪の赦しの喜びを知らないからです。人間は不完全で罪を持っていますが、そのかわり、罪赦された喜びを知っています。だから、人間は、罪の赦しを伝えることができるのです。神は、罪に苦しんでいる人間への伝道を、罪の赦しを知っている人間に、お任せになったのです。羽のついた天使が世界を行き巡れば、たちまちにして福音は伝えられるかもしれません。しかし、神は、天使のように羽を持たない、足で歩き回ることしかできない私たちに福音を委ねられました。聖書では、「足で歩く」というのは、「地上の生活をする」あるいは「信仰の生活をする」という意味で使われています。神は、この地上の生活の中で、苦しみ、うめき、救いを求めている人々に、同じ現実の中で生きている私たちを遣わしてくださるのです。イエス・キリストご自身も、天使としてでなく、人間としてこの世に来られ、この地上を歩き回わり、伝道されました。私たちは、道の使命が与えられていることを頭で理解するだけに終わらず、きよめられた心をもってその使命にこたえ、自分の足を使い、実際の行動を通して、伝道に励みたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、伝道を考える時、私たちはその責任の重さのゆえに意気消沈してしまったり、自分の無力を嘆くことが多くあります。しかし、自分の無力を感じるところからきよめが始まり、きよめから伝道が始まることを、今朝、私たちは学びました。私たちは、自分の使命を確認し、きよめを求め、伝道のための一歩を踏み出したいと願っています。「足には平和の福音の備えをはきなさい。」（エペソ 6:15）とあるように、私たちの足を、福音を届ける足として整え、用いてください。主イエス・キリストのお名前によって祈ります。

3/13/2005

ディスカションのために

1. **なぜ神は、福音を伝えるのに、天使たちを用いずに、私たちを用いるのでしょうか。**
2. **福音を伝えるのに必要な条件に、どんなものがあると 思いますか。どの程度その条件を満たせばよいのでしょうか。**
3. **福音を伝える「足」になるために、あなたにはどんなことが出来るでしょうか。**

いちばん大切なこと

マルコ 12:28-34

12:28 律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」
12:29 イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。
12:30 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』
12:31 次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」
12:32 そこで、この律法学者は、イエスに言った。「先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほかに、主はない。』と言われたのは、まさにそのとおりです。
12:33 また『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する。』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。」
12:34 イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。

リック・ウォレン師は、「人生の５つの目的」を二つの聖書の箇所に導かれて作ったと言っています。その二つの箇所というのは、マルコ 12:29-31 とマタイ 28:19-20 です。マルコ 12:30-31 から第一の目的と第二の目的が、マタイ 28:19-20 からは第三、第四、第五の目的が導き出されました。マタイ 28:19-20 については来週お話をすることにして、今朝はマルコ 12:29-31 に目を留めましょう。これは、暗誦聖句にもなっていましたから、何度も目にしたみことばですね。29 節から、もういちど読んでみましょう。

> イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」

一、命じられた愛

聖書には、数多くの戒めがありますが、それは、十の戒め、「十戒」に要約することが出来ます。十戒というと、「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。」などという否定的な戒めの羅列のように思われがちですが、実際はそうではなく、十戒の前半は神への愛、後半は人への愛を教えています。主イエスは、この十の戒めをさらに要約して、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」の二つにまとめられたのです。最初の戒めは申命記から、次の戒めはレビ記から取られていますが、この二つは別々のものではなく、「愛する」ということばでつながっています。人を愛する愛は、神を愛する愛から出てくるものなので、この二つの戒めは切り離すことはできません。神は、人間を、神を愛し人を愛する者として造られました。神を愛し、人を愛することが、私たちに与えられた人生の目的なのです。

ところが、人間は、その罪によって神を愛さなくなり、その結果、互いに愛し合うどころか、互いに憎み合う者となってしまいました。人類の歴史のはじめからそうでした。創世記４章に、アダムのふたりの子ども、カインとアベルのことが書かれています。アベルは神を愛しましたが、カインは神を愛しませんでした。カインも、ささげものを持って来て神を礼拝しています。カインはそのささげものを、うやうやしくささげたかもしれませんが、心からのものではありませんでした。単なる義務として果たすだけで、真心からしたのではなかったのです。しかし、アベルは、神を愛し、こころを込めて、最善のささげものを神にささげました。アベルは神を愛する喜びで満たされました。アベルの満ち足りた姿を見たカインは、アベルをねたみ、憎み、そして、ついに、アベルを殺してしまいました。人類が体験した最初の死は、殺人の死、しかも兄弟殺しでした。神への愛が失われる時、人への愛、兄弟への愛も無くなるのです。人類は、このカインの歴史を繰り返しています。

神は、ユダヤの人々を神の民として選び、彼らに神を愛することを教えました。ところが、ユダヤの人々は、心を尽くして神を愛することを、神の戒めを表面を守ることにすりかえてしまったのです。定められた日に、決まったことをし、それを後生大事に守ることがすべてとなり、神への愛や人への愛を忘れてしまっていたのです。主イエスは、そうしたユダヤの人々に「『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。」（マタイ 9:13）と言われました。ユダヤの人々は幼いころから律法を学んでいました。イエスの教えるようなことは、言われなくてもみな知っていると、思っていたのです。しかし、彼らは、頭では分かっていても、実際には、聖書の意味するところを少しも理解していませんでした。イエスは彼らに、「あなたがたは、ぶよは、こして除くが、らくだはのみこんでいます。」（マタイ 23:24）とも言われました。日本語には「重箱の隅をつつく」ということばがありますが、彼らは、神のことばの枝葉のことにこだわって、神のことばのいちばん大切なこと、基本的なことを見落としていたのです。

けれども、私たちは、イエスの時代のユダヤの人々を笑うことはできません。どこの国の人も、似たり寄ったりで、日本人も同じことをしているからです。日本人もまた、形式や伝統を重んじます。中身よりも外側のものにこだわって、いちど形を作ってしまうとそれをなかなかなか変えようとはしないということは、皆さんもよくご存じのことですね。形式だけではなく、物の考え方もなかなか変えようとしません。古い考え方がいつまでも幅を効かせています。長い間、神のことばに触れることがなく、様々な神々を拝んできたため、聖書がいちばん大切なこととしている「神を愛する」ということがなかなかわからないでいます。おそらく、日本の宗教には、「神を敬う。」ということばはあっても、「神を愛する。」ということばはなかったのではないかと思います。しかも、「神を敬う。」と言っても、それは、神を神棚に奉っておくという意味でしかありません。神棚に供え物をし、お勤めを欠かさなければそれでいいのであって、聖書で言うように、神を慕い、神を想うということがないのです。神社で柏手を打ち、神棚に手を合わせる時、心にあるのは、「家内安全、商売繁盛、無病息災、受験合格」などの自分の願い事であって、神のことではないのです。仏壇に手を合わせる時に、心に思うのは、亡くなった祖父母や両親などのことで、仏を思い見る、その教えを考えるという人は、あまり多くはないと思います。そんな宗教的な背景を持っている私たちですから、クリスチャンになって「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を

愛せよ。」と言われても、神を愛するとはどういうことなのかがすぐには分からないのは無理もないことかもしれません。

では、「神を愛する」ことが分からなくても、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということは分かるのかというと、そうでもないようです。ほんとうの意味で人を愛することは神を愛することなしにはできないことですから、まことの神を知らない社会での人間関係は、たとえそれが、夫婦や親子、親族であっても、愛の関係ができあがっていないことがあります。本来は対等の関係、愛の関係であるはずの人間関係が、支配と服従の関係であったり、利害関係になってしまっているのです。人を自分の下に置くか、人の下になるか、あるいは、その人間関係が自分の益になるか、損になるかということだけで終わってしまうのは残念なことです。「本音と建前」や「あまえ」などいう言葉は、日本の文化に独特なものだと言われますが、これらはみな、「神を愛する」ということが分からないことから、人生の目的が神を愛することに向かっていないことから来ています。神を愛することが分からないと、その代わりに、儀式や形式を守り、人間的なものを誇るようになります。しかし、聖書は、どんなに厳格に宗教の形式を守るよりも、立派な行いをするよりも、また忙しく動き回るよりも、主を愛することが、第一のことでなければならないと教えています。使徒パウロは、コリント人への第一の手紙で、たとえどんなに知識があり、信仰があり、全財産を人々に施したり、また殉教するようなことがあっても、愛がなければすべてはむなしいと言い（コリント第一 13:1-3）、「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。」（コリント第一 16:22）とさえ言っています。主イエスは、現代のクリスチャンについて、「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」（黙示録 2:4）と言って嘆いておられます。主は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」また、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということを、私たちにとっていちばん大切なこととし、これを人生の目的にするよう命じておられます。神を愛すること、そして、神を愛することに基づいて人を愛することを、私たちはいちばん大切なこととして受けとめてきたでしょうか。それを人生の目的としているでしょうか。そのことを、今朝もう一度振り返り、主の前に悔い改めましょう。

二、啓示された愛

しかし、どうしたら、私たちは神を愛することができるようになるのでしょうか。それは、まず神に愛されることから始まります。英語の賛美に "O, how love Jesus, O, how I love Jesus, O, how I love Jesus, Because He first loved me." というのがありますが、この賛美のとおり、まず、神が私を愛してくださいました。その愛を受け入れた時、私たちのうちに、神の愛が注ぎ込まれました。私たちは、その愛によって神を愛し、人を愛するのです。私たちが神を愛する愛もまた、神から出たものなのです。ヨハネの手紙第一 4:7 に「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。」とある通りです。

ヨハネの手紙第一 4:9-10 には、「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」とあります。「ここに愛がある」と言って、聖書

が指し示しているのは、イエス・キリストの十字架です。「親の愛は神の愛を表わす。」と言われ、私たちは、両親から受けた愛や、親しい人々から受けた愛によって、神の愛を感じ取ることがあります。また、聖書の中にも、放蕩息子のたとえ話や良いサマリヤ人のたとえ話など神の愛を表わす物語はいくつもあります。しかし、何にも勝って神の愛を表わしているのは、イエス・キリストの十字架です。教会がその屋根の上に十字架を掲げ、クリスチャンが十字架のシンボルを身に着けるのは、それが神の愛を表わしているからです。そうでなければ、むごたらしい処刑の道具である十字架を飾ったり、身に着けたりするのは、とんでもない悪趣味ということになってしまいます。

ヨハネの手紙は「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。」と言っています。イエス・キリストは神のひとり子です。「ひとり子」という言葉は、イエス・キリストが神にとってどんなにかけがえのないお方であるかを示しています。神は、私たち人間を愛して神の子どもとし、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。」（イザヤ 43:4）と言ってくださいました。神が、罪の中から救い出して神の子どもとした者たちに対して、国々をその代わりに差し出しても惜しくないと言われるのなら、神の御子、ひとり子イエス・キリストのために全世界を、いや全宇宙を与えても不思議ではありません。ところが、神は、イエス・キリストに全世界を与えたのでなく、イエス・キリストをこの世に与えたのです。神は、御子のために人間を犠牲にしたのでなく、人間のために神の御子を犠牲にしたのです。これはなんという逆説でしょうか。しかし、ここに愛があります。ここに神の愛が表わされています。

主イエスは、十字架を前にして、ゲツセマネの園で血の汗を流して、「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。」と祈りました。聖書は「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。」と言っています（ルカ 22:42-44）。ある人は、「イエスが神の御子なら、なぜこんなに恐れるのか。他の宗教の指導者たちは、もっと潔く殉教して行ったではないか。」と言います。そう言う人は、大事なことを見落としています。主イエスは、神の御子であったゆえに、死を恐れたということです。罪ある人間は誰も、本能的に、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル 9:27）ことを知っています。ですから、死を恐れながらも、それを定められたこととして受け入れることができます。しかし、神の御子はいのちの主であって、死ぬべきお方ではありません。罪人を裁くお方であって、裁かれるお方ではありません。であるのに、私たちの罪を背負って十字架の上で神の裁きを受けようとしておられ、そこで死を体験しようとしておられたのです。神の御子に、あってはならないことが起ころうとしていたのです。イエスがゲツセマネで苦しみもだえられたのは、そのためでした。罪のないお方が罪となり、死を味わうことのない方が死を味わうというのですから、その苦しみは、私たちの想像を超えたものです。しかし、イエス・キリストは、その苦しみの杯を、最後の一滴までも、十字架の上で飲みほしてくださいました。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。」とあるように、神は、神の御子の死によって、私たち永遠の命を与えてくださったのです。ここに、愛があります。

神は、私たちが神を信じた時はじめて私たちを愛してくださるというのではありません。私

たちがまだ罪人であった時、神を愛さなかった時、神の敵であった時から、神はすでに私たちを愛してくださっていました。神は、私たちの状態にかかわらず、無条件の愛で私たちを愛しておられます。聖書は「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。」と言っています。ここに愛があります。キリストの十字架に神の愛があります。

三、受け入れるべき愛

神がこんなにまで、私たちを愛しておられるのに、なぜ人々はこの神の愛を受け入れないのでしょうか。聖書は、人間の高慢が、神の愛を受け入れるのを妨げていると教えています。人間は、いつも自分を誇りたがります。自分では自分を救うことができない、神の愛によってしか救われないのに、「神が私を愛してくださったのは、私が宗教の規則を守ったからだ。」「神が私を愛してくださったのは、私が良い行いをしたからだ。」というように、人間の側の何かの功績を誇りたいのです。ですから、神の愛が無条件の愛であるというのは、人間の側には何の誇り与えないので、困るわけです。よく「私のような罪人を、神が愛してくださるなんて、申し訳けない。すこしは良い人間になってから、救いを受け入れましょう。」と言うのを聞くことがあります。謙遜そうに聞こえますが、実際は、神の前には高慢なことばかも知れません。神の無条件の愛を条件付きの愛にしているからです。自分で良い人間になれないからこそ、キリストの救いが必要なのです。神の無条件の愛、十字架の愛でしか、救われないことを知っているなら、どんな条件もつけずに、十字架の救いを、神の愛を受け入れるはずではないでしょうか。

私はメキシコで医療伝道をしている団体、メキシカン・メディカル・ミッションの事務所に行った時、ひとつの絵を見ました。そこには、両手を広げたイエスの姿がありましたが、良く見ると、その後ろに、両手を釘付けられた十字架のイエスの姿も描かれていました。そしてその絵には、こんな詩が書かれていました。

わたしはイエスに尋ねた
あなたはどれほど私を愛してくださったのですか
主はだまって両手をひろげ
「これくらいだよ」と示し
そのひろげた両手に釘をお受けになって
十字架におかかりになった

イエスとともに十字架にかかった強盗でさえ、イエスに救いを願った時、天国を約束されています。イエス・キリストの愛は、イエスが十字架で両手をいっぱいに広げておられるほど広く、無限に大きいのです。この無条件の神の愛に、私は罪人です。私には救いが必要です。あなたの愛が必要ですと、どんな条件もつけず、謙虚に神の愛を受け入れる、それが、十字架に示された神の愛に応える唯一の道です。そのように神の愛を受け入れる時はじめて、私たちは、神を愛することが何であるかを体験として知ることができ、ほんとうの意味で人を愛することができるようになります。イエス・キリストは言葉だけで「神を愛せよ。」「人を愛せよ。」と教えたお方ではありません。キリストは神を愛して十字架への道を歩み、私たちを愛する愛のゆ

えに十字架の苦しみを耐え忍ばれたお方です。このお方を、この愛を、今、あなたの心に、あなたの生活に迎え入れようではありませんか。

（祈り）

父なる神さま、あなたの無限に大きな愛、無条件の深い愛を心から感謝いたします。私たちも、今、その愛の前に、何の条件もつけずに立っています。あなたを愛することをしなかった罪を悔い改めています。あなたは「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と私たちに命じられました。そのことが出来るために、あなたの愛を心に迎え、あなたの愛をいつも思い見、あなたの愛を深く理解し、私たちのすべてをもって、あなたの愛のうちに生きるものとしてください。私たちのあなたへの愛も、人への愛も、あなたから出たものです。もっとあなたに愛をお返しすることができるために、もっと人に愛を注ぐことができるために、あなたの愛で満たしてください。これから執り行う聖餐によって、主の十字架と、そこにあるあなたの愛をなおいっそう確認し、その愛にこたえる者としてください。主イエス・キリストによって祈ります。

3/20/2005

ディスカションのために

1. あなたは "I love you, Lord." と口にして、主を礼拝していますか。もし、そう言うことに抵抗を感じるとしたら、それはなぜだと思いますか。
2. 神への愛と人への愛にはどのような関係がありますか。神への愛なしに人を愛することが出来るでしょうか。また、人への愛なしに神を愛することができるでしょうか。
3. 神に愛されることと、神を愛することには、どのような関係がありますか。神に愛されることなしに、神を愛することができるでしょうか。また、神を愛することなしに、神に愛されることは可能でしょうか。

それゆえ、あなたがたは

マタイ 28:16-20

28:16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。
28:17 そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。
28:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。
28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、
28:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

教会の長い歴史の中で、イースターの礼拝では「まことに主はよみがえられた。ハレルヤ。」とことばをかわすのが慣わしになっています。私たちも、今朝、高らかにハレルヤと主を賛美したいと思います。私が「主はよみがえられた。」と言いますので、皆さんは、大きな声で「ハレルヤ。」と言ってください。三回くりかえします。「主はよみがえられた。」「ハレルヤ。」「主イエス・キリストはよみがえられた。」「ハレルヤ。」「まことに、主はよみがえられた。」「ハレルヤ。」

一、主の命令

私たちは「人生の５つの目的」を想う、四十日のデボーションを守ってきました。そして、そのデボーションがすこしでも励まされるためにと、パートナーとの祈り、スモールグループでのディスカション、今回を含めて 12 回の礼拝メッセージを聞いてきました。期待以上に恵まれた人、期待通りだった人もいれば、期待したようにはいかなったという人、本は買ったものの一度も開けなかった人、ワークブックが真っ白という人もあるかもしれません。教会全体での取り組みは一応終わりますが、スモールグループで、また、パートナーと、そして、個人で、もう一度やり直すことができます。今回うまく行かなかったと言う方も、あきらめないで、再び取り組んでみてください。みんなが「人生の５つの目的」を学び、同じスタートラインに立って、進んで行きたいと思います。

リック・ウォレン師は、「５つの目的」は、マルコ 12:30-31 とマタイ 28:19-20 の二つのみことばから導き出されたと言っています。マルコ 12:30 に「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」とあるのは、神を愛し、神と交わる「礼拝」という第一の目的を、マタイ 28:19 に「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け」とあるのは、バプテスマ（洗礼）によって神の家族に加えられる「交わり」という第二の目的を教えています。マタイ 28:19 に「あらゆる国の人々を弟子としなさい。」とあるのは、キリストの弟子となる「弟子訓練」という第三の目的を、マルコ 12:31 に「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」とあるのは、教会の中で互いに仕えあう「奉仕」という第四の目的を教えています。そして、マタイ 28:20 の「わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」とあるのは、私たちに与えられた使命「伝道」という第五の目的を教えています。

マルコ 12:30-31 で、主イエスは、十戒を要約して、神への愛と人への愛について教えました。十戒は、旧約にある神の命令の要約ですから、主イエスは、ここで、十戒だけでなく、旧約の命令のすべてを要約したと言ってよいでしょう。マタイ 28:19-20 は、主イエスが弟子たちに教えてきたすべてのことを要約しています。マルコ 12:30-31 が旧約の命令の要約であるなら、マタイ 28:19-20 は新約の命令の要約であり、マルコ 12:29-31 とマタイ 28:19-20 の二つのみことばは全聖書の命令の要約となっています。ですから、この二つのみことばに基づいた「５つの目的」は、聖書のすべての命令をまとめあげたものであると言うことができます。「５つの目的」を学ぶことによって、神が私たちに命じておられるすべてを学ぶことができるわけですから、これはほんとうに素晴らしい学びです。この四十日に十分に学ぶことができなかった方は、今年はあと四十週残っていますから、四十週かけてでも、ぜひ学んでいただきたいと思います。

二、主の命令と権威

けれども「５つの目的」は、ただ知識として学べばそれでそれで良いというものではありません。大切なのは、それを実行に移すことです。しかし、神を愛し、人を愛すると言っても、簡単にできることではありません。多くの人は、自分のうちに神を愛する愛のないことを嘆き、人を愛せないことに苦しんでいるのではないでしょうか。キリストのようになるまで成長したいと願いながら、すこしもキリストらしくない自分を見てがっかりすることが何度もあったのではないでしょうか。しかし、こうした嘆きは、実は正常なことなのです。自分の足らなさを知る人がはじめて成長することができ、そこから、きよめが始まるのです。そして、きよめられた心を持つようになると、神のために働くことができるようになります。人にほめられるためでも、自分の満足のためにでもなく、キリストのからだである教会が建てあげられることを喜びとして、神のために働くことができます。そして教会の中で神と人とに仕えることができるようになると、つぎには、教会の外に出て行って、まだ神を知らない人々、キリストを信じていない人々に、キリストの救いを伝えることができるようになります。私たちは、もっと親しい神とのまじわりが欲しい、教会への愛が欲しい、もっと成長したい、奉仕のための賜物を欲しい、伝道のための力が欲しいと願っています。「５つの目的」を実行するためのこうした力はどこから来るのでしょうか。

イエスは「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」と弟子たちに命じました。この命令は、Great Commission（宣教大命令）と呼ばれ、とても大切な部分です。それで、私たちは、この部分だけに目を留めて、その前後のことばを見落としてしまいがちです。しかし、この命令の前後にこそ、この命令を実行する力が隠されているのです。マタイ 28:19 をもう一度見てください。「それゆえ」という言葉から始まっていますね。「それゆえ」という言葉は小さな言葉ですが、あってもなくてもよい言葉ではありません。この言葉をはずしてしまうと、大切なものを見失ってしまいます。「それゆえ、あなたがたは…」と言われているのは、主イエスが弟子たちに与えた命令には、「それゆえ」と言われる根拠があること教えています。

その根拠とは何でしょうか。18 節に「わたしには天においても、地においても、いっさいの

権威が与えられています。」とあるように、それは主イエスの権威です。イエスは、もとから神の御子としての権威を持っておられました。イエスは人々を教える時、「律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えた」（マタイ 7:29）とあります。イエスは「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）と言われました。「神のところに行きなさい。神があなたを休ませてくれます。」と言ったのではなく、「わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と言われたのです。イエスは、人生の重荷を抱え、疲れきった者を休ませる力を持っておられるお方です。私たちを含め、世界中のどれだけの人がイエスの愛の招きに応じてほんとうの安らぎを見出し、生きる力と希望を得てきたことでしょうか。イエス・キリストは人を救う権威を持ったお方なのです。

しかし、主イエスは、十字架の上では、ご自分の一切の権威をお捨てになりました。神の御子という身分さえも投げ出して、ひとりの罪人になりきって、神の刑罰を受けました。聖書はこのことを、「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」（ピリピ 2:6-8）と書いています。

イエスは十字架で死なれましたが、誰かから命を奪われたのではなく、ご自分から命をお捨てになったのです。主は、ヨハネ 10:18 で、「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」（ヨハネ 10:18）と言っておられます。イエスは「捨てる権威」という言葉を使っておられますが、これは、なんと、逆説的な権威でしょうか。この世では、権威を持っている人はその権威にしがみつき、もっと権威を増し加えようとします。しかし、主イエスは、私たちの救いのために進んでご自分のすべてをささげたお方です。イエスがご自分をお捨てになったあの十字架に、あの惨めで無力な姿の中に、イエスのほんとうの権威、イエスの愛の権威が示されているのです。イエスの権威は、私たちを上から押さえつける権威ではなく、私たちを罪の中から引き上げ、救い出す権威なのです。私たちは、この権威によって救われているのです。

けれども、イエスが死んだままであったら、誰も、イエスの権威を知ることはできません。イエスは、「それをもう一度得る権威があります。」と言われたように、死を打ち破り、復活し、そして昇天することによって、ご自分の権威を明らかにされました。「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」（ピリピ 2:9-11）と書かれているとおりです。イエスが「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」と言われた権威とは、このような権威のことです。どこの国の支配者にもまさる権威を主イエスは持っておられます。主イエスの権威は、全世界に及ぶのです。ですから、主イエスは、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」と弟子たちに命じることができたのです。主イエスが私たちに命令をお与えになる時は、かならず、それを実行する力をも与えてくださいます。伝道は人間の力だけ

で出来るものではありません。イエスが伝道を命じられる時には、かならず、伝道のための力も与えてくださるのです。伝道ばかりでなく、主が「忍耐しなさい。」「祈りなさい。」「悔い改めなさい。」「恐れてはいけません。」などと命じられる時、主は同時に、忍耐する力、祈る力を与えてくださいます。主は、ほんとうに恐れるべき神の権威を示したうえで、私たちに「恐れるな。」と語りかけてくださるのです。主の権威に目を留めましょう。主がその命令と共に私たちに与えようとしておられる力によって、主の命令を果たしていきましょう。

三、主の命令と約束

今朝、もうひとつ覚えておきたいことは、主の命令には、必ず約束が伴っているということです。主イエスは弟子たちに、「行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」と命じましたが、それとともに、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と約束してくださいました。主は、弟子たちに「行きなさい。」と命じましたが、弟子たちだけを伝道に向かわせたのでなく、主は、「わたしもいっしょに行こう。わたしはいつもいっしょにいる。」と言って、弟子たちとともにいてくださったのです。ヨシュアがカナンに遣わされようとしていた時、主は、彼に「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」（ヨシュア 1:9）と約束されました。パウロがコリントで伝道していた時、主は「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。」（使徒 18:9-10）と言われました。マルコ 16:20 には、「主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた。」とあります。

「主は彼らとともに」というのは、なんと力強いことばでしょう。主がともにいてくださる、一切の権威を持っておられるお方がともにいてくださるというのは、なんと心強いことでしょう。恐れに取り囲まれる時、孤独を感じる時、さまざまなことに失望してしまう時、そこに打ち消すことのできない主の臨在を感じることがあります。恐れに囲まれながらも勇気がわいてくるのを感じます。孤独の中にありながら慰めを受けます。失望の中から希望をつかみとります。そこに主がいてくださるからです。主は、多くの場合、私たちが祈った通りに答えてくださり、願ったとおりのことをしてくださいますが、時として、祈ったとおりにはならず、願っていることがなかなか実現しないことがあります。私も、そんないらだちを感じながら祈っていて、「主よ、どうしてこのことをしてくださらないのですか。」とつぶやいたことがあります。しかし、その時、主は私の心に「わたしがいるではないか。」と語りかけてくださいました。私ははっとしました。祈っていることの答えはまだありませんでした。奇跡もおこりませんでした。しかし、祈りの答えよりも、奇跡よりも、素晴らしいもの、主ご自身がここにおられるということを、主は私に気づかせてくださいました。特別なしるしはありませんでした。しかし、心に、ひたひたと平安がみなぎってきました。「主がともにおられる。」このことによって私たちは恐れを乗り越えることができます。「主がともにおられる。」これは、信仰者の力であり、勇気の源です。教会はこのことを「臨在の恵み」と呼んできましたが、主は、主の命令に答え、従おうとする者たちに、このような臨在の恵みを約束しておられるのです。

「あらゆる国の人々を弟子としなさい。」という命令は、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」という根拠と、「わたしは、世の終わりま

で、いつも、あなたがたとともにいます。」という約束に両側から挟まれています。主が私たちにくださったどの命令も同じです。神を愛することに関しても、人を愛することに関しても、自分を成長させることに関しても、また、与えられた使命を果たしていくことにおいても、すべて、根拠と約束で挟み込まれています。それはちょうどサンドイッチのようです。サンドイッチは、中身だけ取り出して食べるものではなく、中身を挟んでいるパンごとかぶりつくものですね。そのように、私たちは、その根拠と約束と一緒に主の命令を受け入れましょう。主がなぜ、私にこのことを求められるのかを理解しましょう。そして、そこに約束された主の臨在を体験しましょう。私たちは、今朝、「主は、よみがえられた。」「たしかに主は、よみがえらえた。」と告白しました。主は、なんのためによみがえられたのでしょうか。今も生きて、私たちとともにいるためです。今も生きて、ともにいてくださる主によって、はじめて、私たちは、人生の５つの目的を実行に移すことができるのです。イースターのこの朝、私たちもまた、主を心に迎え入れ、主とともにある人生を歩みはじめようではありませんか。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、主イエスの復活により、主イエスが、天においても地においても一切の権威を持っておられることを、示してくださいました。それは、聖書にある通り、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白するためです。私たちの人生と永遠は、イエスをどのようなお方とするかにかかっています。私たちが主イエスの権威を受け入れる時、主イエスもまた私たちに神の子とされる権威をさずけてくださいます。今朝、ふたりの姉妹がイエスはキリスト、主ですと、言い表して、洗礼を受け、公に神の子どもであると宣言されました。そのことを、ここに集まった会衆一同と心から感謝いたします。どうぞ、同じ告白を言い表わす人々が続きますように。また、イエスを主と告白する者たちが、あなたの定めてくださった人生の目的を追い求め、あなたの力と臨在のうちに生きることができますように。常に、変わらず、信じる者とともにいてくださる主イエス・キリストのお名前で祈ります。

3/27/2005

ディスカションのために

1. あなたは、キリストの宣教命令に、どのようにこたえることができますか。具体的にどんなことができるでしょうか。
2. キリストがすべてのものの主であることは、あなたにとって、どのように慰めとなり、力となりましたか。
3. どんな時に、キリストの臨在を最も身近に感じることができますか。どうしたら、いつもそれを身近に感じることができるでしょうか。